

30331

教科書文庫

3
815
41-1902/
2000 40100

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

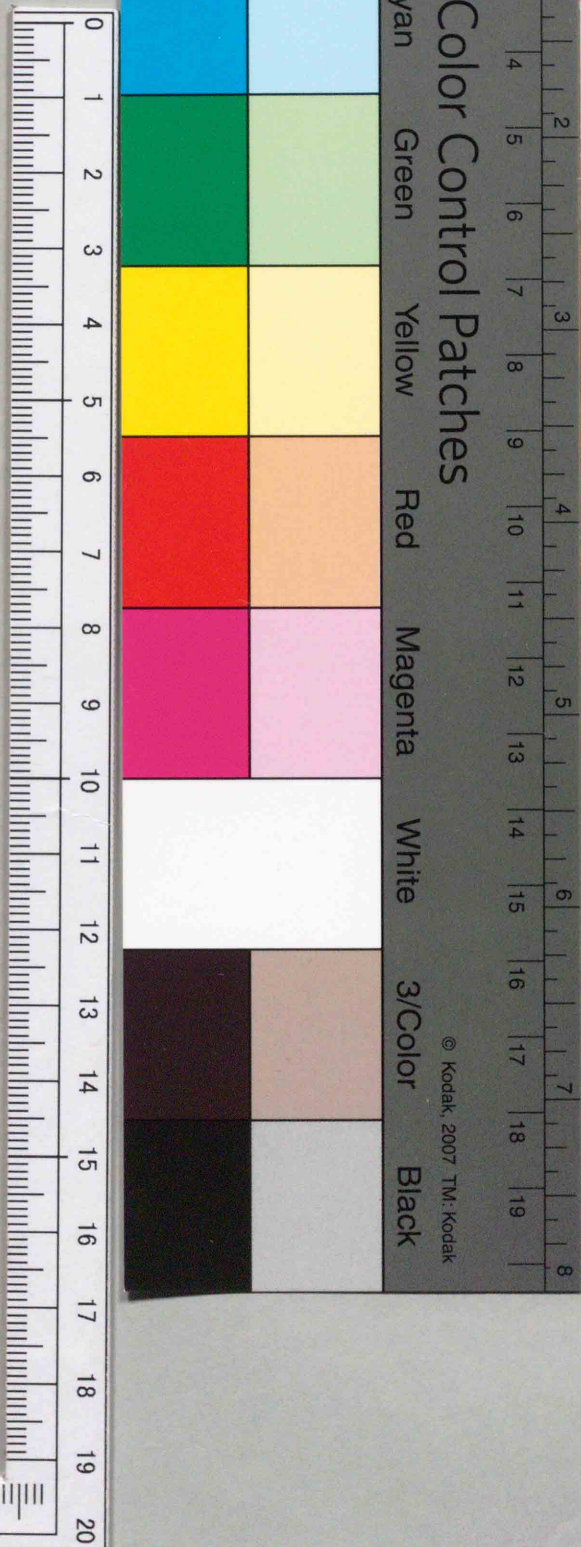


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
Ot21  
資料室

# 日本文法中教科書

文部省檢定濟  
大槻文彦著 全



375-9  
0t21  
文部省資料  
定檢

明治卅五年七月一日 中學校及師範學校國語科用

文學博士 大槻文彦著

# 日本文法中教科書

東京大阪

開成館藏版



## 例言

本書は、余が前著「修正日本文法教科書」と連絡して、中學校四年五年兩級の教科書に充てむとて、國文法の大要を、稍詳密に説きたるものにて、この程度の教育に於ける、讀書及び作文の上に缺くべからざる、文法上の知識の一斑を與ふるを目的とせり。  
本書編輯上の用意は左の如し。

- 一、本書に説けるは、主として、現代の文法なり、されども、學ぶ者の程度に應じて、必要なる限、中古文の法格にも涉れる所あり。
- 一、本書は、言語篇と文章篇との二部にて成り、第一章乃至第十章を言語篇とし、第十一章以下を文章篇とす。
- 一、言語篇にては、先づ、始に、言語の種類を擧げて、品詞の名目を知らしめ、次に各品詞に就きて、その構成、種類、意義、用法等を説き、一一、多くの演習例題を添へ、かくて、既得の知識の應用を試るべくせり。

例言

一

一、品詞の轉成及び接頭語、接尾語等は、各その所屬の品詞の條下に説きたり、これ、かく、せざれば、その品詞に關する知識を悉すこと能はざればなり。

二、文章篇は、文法科に於ては、最緊要なり、この明確なる知識なくして、正しく意を通じ、義を解すること能はず。

本書は、繁雜なる名目を立つることの、學ぶ者をして、徒に煩に堪へざらしむる弊あるに鑑みて、つとめて、叙述の簡明を尙び、文脈の解剖には、すべて、圖式を用ゐることとせり。

三、引用例、又は演習題の材料は、多くは、中等教育程度の上級用の教科書に資れり、漢文なるも、然り。今、煩を厭ひて、一一、その出典を示さず。

余が著作に、「廣日本文典」、「同別記」、各一卷あり、本書につきて解しかぬることあらば、この二書を參考すべし。

### 日本文法中教科書目次

其直瀆河時代行  
本居氏阿曾其也  
其則書  
八代其書、其書其書  
言其其、其書其書  
其書其書  
其書其書

第一章	單語、熟語、疊語、接頭語、接尾語、品詞……………	一
第二章	名詞、代名詞、數詞……………	六
第一節	固有名詞、普通名詞……………	七
第二節	代名詞……………	九
第三節	數詞……………	一三
第四節	名詞に屬する接頭語、接尾語……………	一四
第三章	動詞……………	一八
第一節	動詞の性……………	一八
第二節	動詞の活用法……………	二一
第三節	動詞に屬する接頭語、接尾語……………	二八
第四節	動詞の誤……………	三二

此の  
續  
れ  
に  
は  
別

第四章	形容詞	三五
第一節	形容詞の活用法	三六
第二節	形容詞に屬する接頭語、接尾語	四〇
第五章	助動詞	四四
第一節	助動詞の活用法	四四
第二節	助動詞の意義	四五
第三節	時	五三
第四節	助動詞の誤	六一
第六章	副詞	六六
第一節	副詞の用法	六七
第二節	副詞に屬する接頭語、接尾語	七〇
第七章	接續詞	七六
第八章	亘爾乎波	七八

言  
語  
の  
変  
化  
一、形  
二、言  
三、沙  
尾

第一節	名詞にのみ屬く亘爾乎波	七八
第二節	種種の語に屬く亘爾乎波	八四
第三節	動詞にのみ屬く亘爾乎波	八九
第四節	亘爾乎波の誤	九五
第九章	感動詞	九七
第十章	濫習雜題	一〇三
第十一章	文	一一〇
第一節	單文の構成	一一一
第二節	聯構文の構成	一一五
第三節	修飾語	一二九
第四節	語句の倒置、省畧	一二七
第五節	文脈の解剖	一三〇
第十二章	結法	一四〇

第十三章 呼應……………一四七

第一節 標準、目的の呼應……………一四七

第二節 副詞の呼應……………一四九

第三節 反語の呼應……………一五一

日本文法中教科書目次終

日本文法中教科書

第一章 單語。 熟語。 疊語。

接頭語。 接尾語。 品詞。

例一。 あはれ なつかしき 燕 は 山 又  
 山 を 越えて はや 舊の 巢  
 に かへり ぬ。

右の文を一つ一つの語に分てば、十七となる、その一つを單語といふ。

さて、この單語の中にて、「燕」「山」「舊」「巢」などは物事の名をいふ語なれば、**名詞**といひ、「越え」「かへり」などは物事の動作をいふ語なれば、**動詞**といひ、「なつかしき」は物事の有様を形容する



Handwritten notes and stamps at the top of the page, including numbers like '140', '44', and '27', and some illegible characters.

品詞

語なれば、**形容詞**といひて、ぬなどは動詞の意義を助くる語なれば、**助動詞**といひ、はやは「かへり」といふ動詞に副ひて、その意義を修飾する語なれば、**副詞**といひ、又は「山」と「山」との二語を接ぎ合する語なれば、**接續詞**といひ、「は」「を」「の」「に」などは他の語と語との關係を示すものなれば、**互爾乎波**といひ、あはれは感動に發する聲をあらはす語なれば、**感動詞**といふ。單語の以上八品を**品詞**と名づく。

例二。夕月夜 汐 みち來 らし 難波江

の 蘆 の わか葉 を こゆる 白波。

例三。都近き 所所 に も 御志 ある

國國 の 兵 よりより うち出て

つれ ば 合戦 も 度度 に なりぬ。

熟語 疊語

接頭語 接尾語

右の二例なる「夕月夜」「難波江」「わか葉」「白波」「所所」「御志」「國國」「度度」などは、二つ以上の單語相合ひて、各一つの名詞を成し、「みち來」「うち出て」などは、二つの單語相合ひて、各一つの動詞を成し、「都近き」は同じく一つの形容詞を成し、「よりより」は同じく一つの副詞を成す。かく、二つ以上の單語の相合ひて、一つの品詞を成せるものを、**熟語**といふ、その中にて、「所所」「國國」より、「度度」など、同じ語の相重りて成れる熟語には、別に**疊語**の名あり。又、右にいへる「御志」の「御」の如く、常に他語の頭に接して、これと熟語となりて一品詞を成すものを、**接頭語**といふ。接頭語に對して、**接尾語**といふものあり、常に他語の尾に接

して、これと熟語となりて一品詞を成す。例へば「汝ら」樂し  
げ「春ながら」等の如し。

接頭語と接尾語とは、品詞として獨立には用ゐられず、他語  
と熟語となるにも、慣用の例に據るべきものにて、漫に用ゐ  
るべきにあらず。

凡そありとある國語は、皆、八品詞に分屬す。各品詞には單  
語なるもあり、熟語なるもあり、又、接頭語もしくは接尾語を  
含めるものもあり。

次の諸例を品詞に分ち、その熟語或は疊語なるもの、接頭  
語もしくは接尾語を含めるものには、特に註を施せ。

例 夙（熟）にお（熟）き、よ（熟）は（熟）に（熟）、お（熟）ほ（熟）と（熟）のご（熟）もり（熟）て（熟）、民（熟）の（熟）、う（熟）  
れ（熟）へ（熟）、を（熟）、き（熟）かせ（熟）給（熟）ひ（熟）、き（熟）。

- 一 功あるをば必ず賞（熟）し、罪あるをば必ず罰（熟）す。
- 二 父祖の掟にたがふは、家門（熟）をうしなふしるしなり。
- 三 昔人をえらび用ゐられし日は、まづ徳行をつくす。
- 四 およそ、王土にはらまれて、忠をいたし、命を捨つるは、人臣の道な（熟）り。
- 五 二人はこの邊の案内者なりければ、山山峰峰、残る所なく搜しけ（熟）り。
- 六 汝等心ある者ならば、天恩を戴きて、私の榮花を期せよ。
- 七 切岸の高き、堀の深さ、幾程もなし。
- 八 波うちぎはにうち寄せて、弓手の沖を見渡せば、主上を始め奉り、  
國母建禮門院、北政所、方方の女房達の御船共、その數漕ぎ並べ、屋  
形屋形の前後には、御簾も几帳もさゝめきけり。
- 九 あなあははれや、正成はや、自害をしてけり、敵ながら、弓矢取つて尋  
常に死にたる者かな。
- 十 夏草のしげみが下のうもれ水ありと知らせてゆく蓋かな。

第二章 名詞 代名詞 數詞

名詞

名詞は有形、無形の一切の事物の名をいふ語にて、その下「が」の、「に」、「を」、「と」、「へ」、「より」、「まで」等の「亅爾乎波」に接すべきものなり。「動詞の轉じて名詞となることあり、例へば、「喜ぶ」、「かすむ」、「教ふ」、「取り扱ふ」等の動詞は、轉じて「喜び」、「霞」、「教」、「取扱」等の名詞となり、更にまた他の語と合ひて、「喜び顔」、「春霞」、「教草」、「取扱所」等の熟語の名詞となるが如し。

形容詞の語根も、他の名詞と合ひて、熟語の名詞を成すことあり、例へば、「淺し」、「黒し」、「同じ」、「嬉し」等の、「淺瀬」、「黒雲」、「同じ年」、「嬉し涙」等となるが如し。

名詞の疊語は、「山々」、「川々」、「木々」、「草々」、「津々」、「浦々」、「色々」、「状々」、「人々」、「我々」、「夫々」、「何々」、「次々」、「思々」などの如く、事物の數多きを示し、或は、共に然るを示す。

第一節 固有名詞 普通名詞

例一 門前、草深くして、庭上、露茂し。

例二 鎌田、堀河を馳せ越えて、重盛に組まむと

落ち合ふ。

右の二例なる、「門前」、「草」、「庭上」、「露」、「鎌田」、「堀河」、「重盛」は皆、名詞なり。その中、「鎌田」、「重盛」は人名、「堀河」は地名にて、これらはその一事物の固有の名なれば、**固有名詞**といふ。固有名詞ならぬ、他の一切の名詞は、その同種類の事物に通ぜる名なれば、**普通名詞**といふ、即ち、かの「門前」、「草」、「庭上」、「露」などの如し。

次の諸例の中にて、名詞を求め、これを、固有名詞と普通名詞とに分て。

固有名詞  
普通名詞



例。弓は養由をも耻ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。

弓、天、鳥、地、獸、こと、普通名詞、  
養由、固有名詞。

- 一、今井は木曾をさきだて、ひき返しひき返し、命を惜まず戦ひけり。
- 二、峯の白雪深くして、谷の氷もとけざりけり。
- 三、義経は鷲尾に具せられて、敵の城の後なる鵜越をぞ登りける。
- 四、春の鹽風身にしみて、秋の嵐の音冷じき所なり。
- 五、信頼といふ大臆病人が、待賢門をばや破られつるぞや。
- 六、琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。
- 七、大夫といふ黒馬には、白覆輪の鞍置きて、いたはり引かせらる。
- 八、件の男器量人に越え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つぎ早の手利なり。

玄野三秋ハ  
はり流雲  
名僧ナリ、  
百五郎ヲ入ル

- 九、吉野の宮には、もとの延元の號なれば、國國も思思の年號なりき。
- 十、大般若の櫃の中をよくく捜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。
- 十一、舊き都を來て見れば、淺茅が原とぞあれにける、月の光はくまなく、秋風のみぞ身にはしむ。
- 十二、吉野山、こそそのしをりのみちかへて、まだ見ぬかたの花をたづねむ。

第二節 代名詞。

例一。われは、かれは、たれなるかを、汝に告げむ。  
例二。これと、それと、あれと、いづれか善き。

代名詞  
右の二例なる、「われ、かれ、たれ、汝、これ、それ、あれ、いづれ」などは、すべて、人、事物等の名に代へていふ語にて、代名詞といひ、名詞の一種なり。さて、例一なるは、人に就きて用ゐれば、人代名詞といひ、例二なるは、事物等を指示すにいふ代名詞

指示代名詞

自稱  
對稱  
他稱  
不定稱<sup>フダチシヨ</sup>

なれば、**指示代名詞**といふ。  
人代名詞に、四種の別あり。「われ」の如く、話す人自ら、己が名に代へて用ゐるを、**自稱**といひ、「汝」の如く、わが話かくる人の名に代へていふを、**對稱**といひ、「かれ」の如く、對手との間に話出す人、又は、われと隔りたる人の名に代へていふを、**他稱**といひ、「たれ」の如く、對稱、他稱の中にて、その名を知らぬ人、又はそれと定めぬ人の名に代へていふを、**不定稱**といふ。不定稱は、又名を指さぬ衆人をいふことありて、「たれか思はむ、誰も知る」など用ゐる。

人代名詞の尋常なるものは、次の如し。

自稱	對稱	他稱	不定稱
あ、あれ、 わ、われ、 (我)	な、なれ、 なむぢ、 (汝)	か、かれ、 あ、あれ、 (彼)	た、たれ、 (だれ)、 (誰)

近稱  
中稱 遠稱  
不定稱

その他にも、或は普通名詞、指示代名詞等を借りて、古今、雅俗尊卑、男女等に用ゐるもの、尙、甚多し。  
指示代名詞にも、亦、四種の別あり。前に挙げたる、例二の、「これ」の如き、最近きにいふを、**近稱**といひ、「それ」の如き、稍離れたるにいふを、**中稱**といひ、「あれ」の如き、遠きにいふを、**遠稱**といひ、「いづれ」の如き、名を知らぬ、又は、それと定めぬにいふを、**不定稱**といふ。不定稱は、又博く、諸事物、諸處をいふことありて、「いづれも同じ」など用ゐる。

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ、これ、	そ、それ、	あ、あれ、 か、かれ、	いづれ、なに、 (どれ)、(どれ)、
地位	こ、ここ、	そ、そこ、	あ、あそこ、 か、あそこ、	いづれ、どこ、 (どこ)、

方向	近稱	こ、こなた	遠稱	あ、あなた	不定稱
	中稱	そ、そなた	か、かなた	いづかた (どなた)	
		こ、こち	あ、あち	いづち (どち)	
		そ、そち	か、あち		

次の諸例の中にて、代名詞を求め、それがいかに用ゐられたるかをいへ。

例 ここを固め給ふは誰人ぞ、名のらせ給へ。

ここ、

地位の指示代名詞、近稱。

誰人、

人代名詞、不定稱(熟語)。

一、これはなにといふ事ぞ。

二、たゞ今さけぶは何者ぞ、あれ見てまゐれ。

三、あの雪もちたる木は、某が秘藏にて候ふ。

四、朕汝を以て股肱とす、慎んで命を全うすべし。

- 五、われこそ兄なれば、今日の先陣をば、たれかは駆けむ。
- 六、この山には鹿はなきか、かの悪所をば、鹿は通らすや。
- 七、いづくを指すともなく、足に任せて落ち行き給ふ。
- 八、汝が不覺に防げばこそ、敵度度駆け入るらめ、かれ速に追ひ出だせ。
- 九、御子達も、あなたかなたに遷され給ひぬ。
- 十、憶良らは今は罷らむ、子泣くらむ、そもその母も、あを待つらむぞ。

第三節 數詞

例 唐櫃三つあり、二つの櫃は未だ蓋を開けず。

數詞

右の例なる「三つ」「二つ」などは、事物の數をいふ語にて、數詞といひ、また、名詞の一種なり。

數詞は、次の如く、熟語に用ゐらるゝことあり。

- 一、夜
- 二、心
- 三、筋
- 四、時
- 五、月
- 六、藝
- 七、曜
- 八、州
- 九、卿
- 十、度
- 百、年
- 千、代
- 萬、歳

名詞に屬する接頭語

第四節 名詞に屬する接頭語、接尾語。

名詞に屬する接頭語の著きものを次に示す。  
初春、初學、新參、小松、御代、真心、僻目、えせ  
者、幾夜、諸人、不忠、無慈悲、第一、本年、當人、  
さ夜、み空、を田。

名詞に屬する接尾語

名詞に屬する接尾語の著きものは次の如し。

一、名詞のみに接するもの。  
ら。「われら」「これら」をとめら「範頼、義經ら」。  
なご。「月、花などのながめ、物なともてまゐり」。  
ごも。「物ども」「兵ども」「船ども」。  
たち。「皇子たち」「公たち」「友たち」。  
ばら。「殿ばら」「奴ばら」。  
がた。「宮がた」「華族がた」。  
以上の六語は物事

の數あるを、統べていふに用ゐる。  
ごち。「友ごち」「女ごち」。  
なる意にいふ。この語は互に伴侶  
二、他語に接するもの。  
げ。「人げ」「心ありげ」「悪げ」「嬉しげ」。  
事物の形狀、情態をいふ。この語は  
さ。「遠さ」「善さ」「悪しさ」「悲しさ」。  
事物の形狀、程度をいふ。この語は  
み。「深み」「高み」「赤み」「重み」。  
いひ、その程の處をいふ。この語は程を  
に、形容詞の語根にのみ附く。以上の二語は、共  
三、事物を數ふるにいふ漢語。  
「一個」「二號」「三番」「四本」等。

次の諸例の中にて、名詞(代名詞、數詞)を求めて、その種類を別ち、接頭語と接尾語とは、特に標示せよ。

例。林間に酒を煖めて、紅葉を焼く、といふ詩の心をば、されば、それらには誰か教へけるぞや。

林間、酒、紅葉、詩心、普通名詞。

それら、人代名詞、他稱。

誰、人代名詞、不定稱。

- 一、 足下、何書を讀み、何の業を講じ給ふか。
- 二、 二月上の六日の事なれば、月は宵よりはや入りぬ。
- 三、 その後、世鎮りて、文治のころ、勅撰あり、今の千載集これなり。
- 四、 かれといひ、これといひ、進退こゝにきはまれり。
- 五、 火などをかけなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。
- 六、 右衛門督は御邊に大小事を申しあはす、とこそきこゆれ。
- 七、 爲朝は兄たちをも蔑にするえせ者として、親に不興せられけり。

- 八、 あれ制せよ、者共爲朝が弓勢は目に見えたることぞかし。
- 九、 軍兵等、渚渚の篝火、海士の蓬屋の藻鹽火やと、いとも興ありて思ひけり。
- 十、 實盛先づ一騎の武者に、驅けあはせ、吾君は誰そと問へば、安藝國の住人東條五郎と名のる。
- 十一、 汝が親には、嫡子か末子か、名乗はいかにと問ひ給へば、名は未だ附かず、親には三郎に相當り候ふと申す。
- 十二、 岸はるかに晴れて、百の臺にすだれを捲き、風しづかに吹きて、千の船の帷を動かせり。
- 十三、 遠山にかゝる白雲は、ちりにし花のかたみなり、青葉にみゆる梢には、春の名残ぞをしまる。
- 十四、 彼等が頭を、正行が手にかけて取り候ふか、正行正時が首を彼等に取りられ候ふか、その二つの中に、戦の雌雄を決すべきにて候ふ。
- 十五、 卯月二十日あまりのことなれば、夏草のしげみが末をわけいらせ給ふには、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなし。
- 十六、 われこそは、新島守よ、隱岐の海の荒き浪風、心して吹け。

動詞

第三章 動詞

動詞は、事物の、有意の動作、又は、無意の作用をいふ語なり、例へば、「人、行く」、「花、落つ」の如し。又、稀には現象をいふものあり、例へば、「山あり」の如し。

動詞は、名詞又は他の動詞の下に合ひて、熟語の動詞と成ることあり。例へば、「罪す」、「感ず」、「議論す」、「爪突く」、「物語る」、「請願ふ」、「仕へ奉る」、「書き取る」などの如し。

第一節 動詞の性

例一。花、散る。

雨、降る。

例二。われ、友に逢ふ。

水、湯となる。

右の例にて、「散る」、「降る」、「逢ふ」なる等の動詞のいふ動作は、それごとく、その動作をなす事物の、「花」、「雨」、「われ」、「水」等に止るのみ

動詞の性

自動

標準

有對自動

無對自動

にて、他に及ばず、かゝる性質の動作を自動といふ。自動の中に、例二なる「逢ふ」なるの如く、別に、その動作の係るべき標準たる、「友」、「湯」等の事物を挙げざれば、意を全うせざるものあり、これらを有對自動といふ。これに對して、例一なる「散る」、「降る」等を無對自動と名づく。標準には、「に」、「と」、「へ」、より、「から」、「まで」等を要す。

例三。人、衣を着る。

鳥、巢を造る。

例四。風、浪を岸へ寄す。

松、影を水に映す。

右の例にて、「着る」、「造る」、「寄す」、「映す」等の動詞のいふ動作は、それごとく、その動作をなす事物の、「人」、「鳥」、「風」、「松」等に止らずして、その他の事物の、「衣」、「巢」、「浪」、「影」等を處分す、かゝる性質の動作を他動といひ、その處分せらるゝ事物を、他動の動作の目的といふ。他動の中にも、例四なる「寄す」、「映す」の如く、別に、そ

他動  
目的

複對他動  
單對他動

の動作の係るべき標準たる「岸、水等の事物を挙げざれば意を全うせざるものあり、これらを複對他動といふ。これに對して、例三なる「着る、造る」等を單對他動と名づく。目的には、豆爾乎波の「を」を要す。

次の諸例にて、動詞を求めて、その性を別ち、標準又は目的をいふ語をも併せて擧ぐべし。

例 父祖の掟にたがふは、家門を失ふしるしなり。

たがふ、 有對自動(標準、掟)

失ふ、 單對他動(目的、家門)

一 楠公の精忠は、日月と光を争ふものなり。

二 舊都に残る人人は、伏見廣澤の月を見る。

三 曉の千鳥の洲崎に噪ぐも、御心を碎く種となる。

四 命を養由が矢先にかけて、義を紀信が忠に比すべし。

五 かげろふのゆふべをまち、夏の蟬の春秋をしらぬも、あるぞかし。

六 しななたちこそ生れつきたらめ、心はなか賢より賢にも、うつさばうつらざらむ。

七 狂人のまねとて、大路をはしらは則狂人なり、悪人のまねとて、人をころさば悪人なり。

八 吉日に悪をなすに、必凶なり、悪日に善をおこなふに、必吉なりといへり、吉凶は人によりて、日によらず。

九 氣霽れては、風新柳の髪を梳り、氷消えては、浪、舊苔の髭を洗ふ。

十 愚なる人は深く物をたのむ故に、怨みいかることあり。

第二節 動詞の活用 法。

例 花咲かむ。 花咲きにほふ。 花咲く。

花こそ咲け。

上三條  
四段

活用  
はたらく  
語根  
語尾

右の例の如く、動詞は、その動作の意を種種に表さむとし、又は、他語に連続せむが爲に、その語の末を轉ず、これを活用といひ、又は、はたらくともいふ。さて、その「さ」(咲く)の「さ」の如く、動かぬ部を、語根といひ、か、き、く、けの如く、轉ずる部を語尾といふ。

あらゆる動詞には活用あり、而して、活用には九類あり。

四段活用

一、四段活用 五十音圖の上より四段の音に活用するものにて、加行、佐行、多行、波行、末行、良行の六種あり。

上二段活用

二、上二段活用 五十音圖の伊の段と宇の段との音に活用し、これに、また、「る」「れ」「よ」の添ふものにて、加行、多行、波行、末行、也行、良行の六種あり。

下二段活用

三、下二段活用 五十音圖の、宇の段と衣の段との音に活用し、これに、また、「る」「れ」「よ」の添ふものにて、すべて十

上二段活用

行十種あり。

四、上一段活用 五十音圖の、伊の一段の音と、これに「る」「れ」「よ」の添ふものにて、活用するものにて、阿行、加行、奈行、波行、末行、和行の六種あり。

下一段流用

五、下一段活用 「け」(蹴る)の一語に限りて、衣の一段の音と、これに「る」「れ」「よ」の添ふものにて活用す。

正格活用

右の五類を正格活用と稱す。

加行變格活用

六、加行變格活用 「來」の一語に限りて、「こ」「き」「く」「くる」「くれ」「こよ」と活用するものなり。

佐行變格活用

七、佐行變格活用 「爲」(御座す)の二語に限りて、「せ」「し」「す」「る」「すれ」「せよ」と活用す。名詞(漢語、外國語)は、この「す」と合ひて、熟語の動詞となり、この類の活用をなす。

奈行變格活用

八、奈行變格活用 亦、「往ぬ」「死ぬ」の二語に限りて、「な」「に」「ぬ」、



良行變格活用

變格活用

ぬる、ぬれ、ねと活用す。  
九、**良行變格活用**。「あり、居り、侍り、いまぞかり」の四語に限り、五十音圖の、良行にて、上の四段の音に活用す。以上の四類を**變格活用**と稱す。あらゆる動詞は活用して、その語氣に、種種の態度を生ず、これを**法**といふ。法に七様あり。

終止法

一、**終止法**。單に動作を言ひて、文を終止する法にて、これに三種の別あり。

第一終止法

その一、**第一終止法**。尋常、文を終止する法なり、これを**動詞の本體**とす。

本體

書を讀む。花落つ。事を勤む。月を見る。

第二終止法

その二、**第二終止法**。上に、**亘爾乎波**の「ぞ、なむ、や、か」の加れる文を終止する法なり。

第三終止法

その三、**第三終止法**。上に、**亘爾乎波**の「こそ」の加れる文を終止する法なり。

書をこそ讀め。花こそ落つれ。事をこそ勤むれ。月をこそ見れ。

中止法

二、**中止法**。文の中間にて、中止し、後に來べき同趣の語に照應する法なり。

書を讀み讀み、文を作る。花落ち落ツル時、鳥鳴く時、事を勤め勤めタル人、功を成したる人。月を見見レば、古を懐へば。

連體法

三、**連體法**。名詞の上に連りて、その性質、狀態等を形容する法なり。

書を讀む人。事を勤むる時。花落つる夕。月を見る友。

◎ 他動詞を連體法に用ゐて、その目的をいふ語の上に連ぬるときは、その動詞は他動の性を失ふ。例へば、

わが讀む書。人の勤むる事。今夜見る月。

この法は、その下にあるべき名詞を略して、用ゐらるゝことあり。

友の讀む(事)を聽く。花の開く(頃)より落つる(頃)まで。人の勤むる(状)に倣ふ。見る(事)を好まず。

四、連用法。他の動詞に連りて、熟語となる法なり。

讀み果つ。落ち入る。勤め行ふ。見返る。

この法、又、稀に形容詞とも連ることあり。

讀み好し。落ち易し。勤め難し。見苦し。

連用法

命令法

○ 但し、良行變格の「あり」は、上に連用法を承けず。  
五、命令法。他に、動作を命じ、又は請願ふ意をいふ法なり。

書を讀め。花、落ちよ。業を勤めよ。月を見よ。

六、不定法

ある助動詞、互爾乎波等に連続せむが爲の

不定法

一法にて、その用法、意義、共に定らず。例へば、讀まむ、落ちず、勤めしむ、見ばなどの如し。

七、名詞法

動詞の轉じて、名詞となる法なり。

名詞法

讀みを覺ゆ。落ち葉を掃ふ。勤めを怠る。花見に行く。

この法によりて、他動詞の名詞となりたるは、その他動の性を失へるが故に、目的をいふ語を取らぬを常とす。以上の七法を、語尾の各轉に當つれば、次の如し、(第一表)。

- 不定法、第一轉
- 中止法、連用法、名詞法、第二轉
- 第一終止法(本體)、第三轉
- 第二終止法、連體法、第四轉
- 第三終止法、第五轉
- 命令法、第六轉

第三節 動詞に屬する接頭語、接尾語。

動詞に屬する接頭語

動詞に屬する接尾語

動詞に屬する接頭語の著きものを次に示す。

彌増す。打ち聞く。取り亂す。差し控ふ。搔き暮す。  
相濟む。さ迷ふ。い行く。た靡く。

他語に接して、動詞とする接尾語の著きものは、次の如し。

めく。自動詞として、その如く成るなど、いふ意をな

す、四段活用なり。「今めく」「時めく」「春めく」。

めかす。「めく」の他動にて、亦、四段活用なり。「今めかす」「ほのめかす」。

がる。「と思ふ」などの意をなす、亦、自動にて、四段活用なり。「嬉しがる」「ゆかしがる」「あはれがる」。

ぶ。「その如く成る」の意をなす、自動にて、上二段活用なり。「大人ぶ」「古ぶ」「ことさらびたり」。

ぶる。「その風す」の意をなす、自動にて、四段活用なり。

○ 「學者ぶる」「利口ぶる」。

次の諸例の中にて、動詞を求めて、その活用と法とを説明し、接頭語と接尾語とは、特に標示せよ。但し、名詞法にて、名詞となれるをも、併せて擧ぐるを要す。

例。 や、春ふかく、霞わたりて、花もやうくけ  
しきだつほどこそあれ。をりしも、雨風う  
ちつゝきて、心あわたゞしくちりすぎぬ。

霞

名詞(末行、四段、第二轉)

わたり、

良行、四段

けしきだつ、

多行、四段、第四轉(連體法)

あれ、

良行變格、第五轉(第三終止法)

うちつゝき、

加行、四段

ちり、

良行、四段、第二轉(連用法)

すぎ、

加行、上二段

- 一。 わが國の軍隊は、世々天皇の統率し給ふ所にぞある。
- 二。 かれはあはれがりて、涙、雨しづくの如く流しけり。
- 三。 ほまれを愛するは、人の聞をよろこぶなり。

- 四。 もしも、心の變ることのありやせむとて、門の外へは出でず。
- 五。 軍のには、戎衣かいつくろひ、秋の霜に、露の命きえを争ふ。
- 六。 雲のゆき、もはやきこ、ちして、月のはれくもること、さだめが  
たし。
- 七。 鳥の聲なども、ことの外に春めきて、のとやかなる日影に、かきね  
のくさもえいづ。
- 八。 わか葉の梢涼しげに、茂りゆく程こそ、世のあはれも、人の戀しさ  
もまされ。
- 九。 ちかき火などに、にぐる人は、しばしとやいふ。身をたすけむと  
すれば、耻をかへり見ず、財をもすて、逃れ去るぞかし。
- 十。 こ、に落つるは、大將とこそ見れ、返せや、とて追つ懸けたり。
- 十一。 もの、ふの、矢並つくりふこての上、に、霞たばしる那須のしの原
- 十二。 君ならで、誰にか見せむ、梅の花色をも香をも、知る人ぞ知る。

第四節 動詞の誤

次の漢字を動詞に訓みて、その七法を作れ。

- 一. 耻チ 老ラウ 教キウ 控コウ 飢キ

○例。

かれ、その父に耻ぢず、不定法。身の不遇を耻

ぢ、交を避く、中止法。おのれの淺學を耻ぢ思

ふ、連用法。會稽の耻を雪ぐ、名詞法。われ、わが

身を耻づ、第一終止法。われ、わが身をぞ耻づる、

第二終止法。耻づる心あるは、義を知る端なり、

連體法。われ、わが身をこそ耻づれ、第三終止法。

汝、弟に耻ぢよ、命令法。

- 二. 報ホウ 榮エイ 堪カン 整テイ 養ヤウ

次の漢字を、幾様にも動詞に訓みて、その自他を別ちて、各七法を作れ。

- 三. 居キ 消シウ 越エツ 絶ケツ 見ケン
- 四. 立リツ 入ニツ 出シュツ 終シュウ 違エイ

次の諸例の誤を正せ。

例。この學校には、寄宿舍を設けあり。

この例にて、加行、下二段活用なる「設け」は、その第二轉連用法に用ゐてあり。されど、「あり」は連用法を承けず、「設けてあり」と正すべし。

五. 床の間に飾りある鑑は、當家の重寶となむ聞ゆ。

六. 公園内にては、魚鳥を捕ふることを禁じあり。

七. この池に網を入るは、たゞりありとぞ村人傳ふ。

八. われは、わが不徳をこそ悲む。決して天をも人をも恨まず。

九. 樂しき學年を迎ふと共に、その一年の計を立つを忘ることなか

十. 爲替はまだ着さずやと、かれに問合す、電報を發したり。

- 十一 友人は、繪畫を研究する目的にて、洋行す旨をしらし來れり。
  - 十二 麓に清き谷川の流れる村ありて、わが友こゝに居る。
  - 十三 この時間中に、文法問題の答を終り、次には、別紙に記載せる英文を譯せ。
  - 十四 白や後る。赤や負く。いづれの艇か勝をえる。
  - 十五 都には君をのみこそ思ひいづる。紅葉のをりも花の盛も。
  - 十六 そこひなき淵やはさわげ。山川の淺き瀨にこそ、あだ浪はたつ。
- 次の漢文を、正しき國文に書き下せ。

- 一 取其所長、棄其所短。
- 二 憂人之憂、樂人之樂。
- 三 賊兵大潰、走者相踐。
- 四 爲人性倨、少禮、面折不能容人之過。
- 五 凡人生欲自保其權利、自增其幸福、天性然也。
- 六 士處世若錐、處囊中其末立見。
- 七 明公莫如延攬英雄、務悅民心、立高祖之業、救萬民之命。

第四章 形容詞

形容詞

**形容詞**は事物の状態、性質、情意等を形容していふ語なり。例へば、「山、高し」、「これ、善し」、「秋は悲し」などの如し。

形容詞は、名詞又は形容詞の語根、稀には動詞の連用法の下に合ひて、熟語の形容詞と成ることあり。例へば、「心好し」、「快物憂し」、「胸苦し」、「細長し」、「長長し」、「成り難し」、「與し易し」などの如し。

右にいへる「長長し」の如き、形容詞の語根に成れる疊語は、その意を深くす。尙、重重し、輕輕し、遠遠しなど、この例なり。

形容詞は、他語を活用して成ることあり、例へば、「大人し」、「鬱陶し」、「執念し」、「甚し」などの如し。また、他語の疊語にて成れるもあり、「事事し」、「物物し」、「馴れ馴れし」、「付き付きし」などの如し。

第一節 形容詞の活用 法。

形容詞も、動詞の如く、語尾に、活用あり、法あり。形容詞の活用は、甚、動詞に異なりて、二類に分る。

一、久志、幾活用。 「く、し、き、けれ」と活用するものにて、唯、一

種あるのみ。「善し、白し、重し」など、これに屬す。

二、志久、志、幾活用。 「しく、し、しき、しけれ」と活用するも

のにて、亦、唯、一種あるのみ。「悪し、烈し、重重し」など、これに屬す。

形容詞の法は、次の四様ありて、その中、終止法、中止法、連體法は動詞にいへると、相同じ。

一、終止法。 その第一終止法は次の如し。

心、善し。 名、悪し。 梅、白し。 風、烈し。

これを形容詞の本體とす。 第二終止法は、例へば、

終止法  
第一終止  
本法  
本體  
第二終止  
法

心ぞ、善き。 名なむ、悪しき。 梅や、白き。 風か、烈しき。

の如く、又、第三終止法は、

心こそ善けれ。 名こそ悪しけれ。 梅こそ白けれ。

風こそ烈しけれ。

の如し。

二、中止法。

性質善く(善シ)、品行修る。 心悪しく(悪シキ)人、行卑し

き人。 幅、廣く(廣ケレバ)、丈、長ければ。

この法は、音便にて、語尾の「く、し、き、を、う、し、う」に轉ずることあり。

三、連體法。

心の善き人。 名の悪しき者。 白き梅。 烈しき風。

重き(物)を取り、輕き(物)を捨つ。

連體法  
中止法  
第三終止  
法

副詞法

この法も、音便にて、語尾の「き」「しき」を「い」「しい」に轉ずることあり。

四、副詞法。

形容詞の轉じて、副詞となる法なり。

善く改る。 悪しく變る。 白く塗る。 烈しく暑し。

その「く」「しく」の、音便にて、「う」「しう」となること、中止法に同じ。

この法は、動詞の「あり」と連りて、善くあらむ、悪しくあり、白くある、烈しくあれなど用ゐらるゝとき、善からむ、悪しかり、白かる、烈しかれなどゝ、約ること常なり。

形容詞の語根は、久志幾活用にては、その本體の「し」を去りたるものとし、志久志幾活用にては、直に、その本體とす。

語根は名詞に用ゐらるゝことあり。

白の手袋。 あやしの法師。 髮長。 夜寒。

語根

他語と合ひて、熟語の名詞、動詞、形容詞となることあり。

長歌。 短夜。 悪し様。 同じ年。 遠離る。 近寄る。

薄暗し。 細長し。 輕輕し。

又接尾語の「み」「げ」「さ」の添はりて、名詞と成ることあり。

高み。 深み。 重げ。 悪げ。 善さ。 遠さ。

嬉しげ。 樂しげ。 悪しさ。 悲しさ。

以上の、形容詞の語根と、語尾の各轉と、法とを表示すること、次の如し。

第二表。

久志幾活用	語根	中止法	本體	連體法	終止法
活志幾活用	よ(善)	第一轉	第一終止法	第二終止法	第三終止法
活志幾活用	あし(惡)	あしく	あし	あしき	あしけれ
			よし	よき	よけれ



形容詞に屬する接頭語

形容詞に屬する接頭語の著きものを次に示す。

小暗し。小高し。幾久し。彌高し。け疎し。た易し。か弱し。

形容詞に屬する接尾語

他語に接して、形容詞とする接尾語の著きは次の如し。

△がまし。志久志志幾活用にて、名詞に接しての如しに似る嫌ありなどの意をなす。「隔がまし、鳥濟がまし」たし。久志幾活用にて、動詞、助動詞の連用法に接して、希ふ意を成す。「見たし、ありたし」。らし。志久志志幾活用にて、その状をあらはす意を成す。「男らし、女らし」。

○

次の諸例の中にて、形容詞を求めて、その活用と法とを説明し、接頭語と接尾語とは、特に標示せよ。但し、副詞法にて、副詞となれるをも、他語と熟語となれる語根をも、併せて擧ぐるを要す。

例 つかき水は涼しげなし。浅くてながれたる、遙にすゞし。

つかき、久志幾活用、第三轉、連體法。

涼しげ、名詞、志久志志幾活用の語根「涼し」と、接尾語「げ」とにて、成る。

なし、久志幾活用、第二轉、第一終止法。

浅く、久志幾活用、第一轉、副詞法、下に

あるべき動詞「あり」を略す。

すゞし、志久志志幾活用、第二轉、第一終

止法。

- 一 天井の高きは、冬さむく、燈くらし。
- 二 あやし竹のあみ戸のうちより、いとわかき男いで來ぬ。
- 三 蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。
- 四 家居のつきくしくあらまほしきこそ、興あるものなれ。
- 五 手のわろき人の、はからず文かきちらすは、よし。
- 六 行末遠き旅の空おもひつゞけられて、いといたう物悲し。
- 七 しづかに思へば、よろづ過ぎにし方のこひしさのみぞ、せむ方なき。
- 八 六月のころ、あやしき家に夕顔のしろく見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。
- 九 よくわきまへたる道には、必、口おもく、とはぬかぎりはいはぬこそいみじけれ。
- 十 をかしきことをいひても、いたく興せぬと、興なき事をいひても、よく笑ふにぞ、しなの程はかられぬべき。
- 十一 梅は白き、うす紅梅ひとへなるがとくさきたるも、かさなりたる紅梅のにはひめでたきも、みなをかし。

十二 すこし、おとなしくなりなば、よも近づけたまはじ、をさなくありなむ時参りてこそ。

次の形容詞を活用して、その四法を作れ。

- 一 清し。 遅し。 猛し。 圓し。 疎し。

例 水清く、魚見ゆ、(中止法) 水清く流る、(副詞法) 水

清し、(第一終止法) 水や清き、(第二終止法) 清き水流

る、(連體法) 水こそ清けれ、(第三終止法)

- 二 新し。 親し。 珍し。 惜し。 事事し。

次の諸例の誤を正せ。

- 一 かれとこれとは、これも惜しく、かれも欲し。
- 二 文のことはなどぞ、むかしの反古どもはいみじ。
- 三 何事もふるき世のみぞしたはしけれ。
- 四 霜いとしろふおける朝、やり水より煙のたつこそをかしき。
- 五 明に治る大御代に生れあへるなむ、こよのう嬉しけれ。

第五章 助動詞

助動詞

助動詞は、動詞の活用の、その意を盡さざるを助けむが爲に、その下に付きて、更に種種の意義を添ふる語なり。例へば、「行きたり」眠りぬ、語らず、言はむ、打たしむなどの如し。又、他の助動詞の下に付くこともあり、「行きたりき」打たしめらるなどの如し。

助動詞の中には、又、名詞、副詞にも付き、稀には互爾乎波に付くものもあり。例へば「月なり」父たり、「時雨せり」強くせり、雲のごとしなどの如し。

第一節 助動詞の活用 法

活用 法

助動詞にも活用あり、法あり。その活用には、動詞に似たるものと、形容詞に似たるものとありて、その法も、これに準ず。

但し、連用法と名詞法とを成さぬが多し、(第三表)。

助動詞は、その數、すべて二十七ありて、分れて動詞の諸活用の第一、乃至第四轉に付くこと、第四表、第五表の如し。

各助動詞も、互に相連續す、その連續の法は、動詞に付くと同じく、即ち、動詞の第一轉に付く助動詞は、他の助動詞にも、その第一轉に付き、動詞の第二轉に付くものは、又、助動詞の第二轉に付く等なり。かく、幾語重疊すとも、個々に分解して、語毎に、固有の意を求めば、解せらるべし、(第六表)。

第二節 助動詞の意義

一、所相の助動詞

動詞のあらはす動作を、わが受くることといふに用ゐる助動詞にて、次の二語なり。  
「聞かる」往なる「居らる」。

所相の助動詞

乾

他身

所相

能相

標準

らる。 「起きらる」「授けらる」「着らる」「爲らる」。  
かくいふ動作を、**所相**といひ、これに對して、「聞く」「往ぬ」、居り、「起く」「授く」、着る、「爲」などの動作を**能相**といふ。所相には、その受くる動作の**標準**をいふ語を要す。

勢相の助動詞

われ、友に志を聞かる。 盜、家人に起きらる。

二、勢相の助動詞

動詞のあらはす動作を、更に、己が力、能く爲すに足る意にいふに用ゐる助動詞にて、次の二語な

「聞かる」「往なる」「居らる」。

「起きらる」「授けらる」「着らる」「爲らる」。

この二語、**所相**の「らる」と、全く異なりて、**所相**の如く、標準をいふ語を要せず。

又、**勢相**の意より轉じて、唯動作の自ら起りて、遏められぬ

使役相の助動詞

目的 標準

が如きにいふことあり。

昔、懷ばる。 待たる。ものは鶯の聲。

三、使役相の助動詞

動詞のあらはす動作を、他を使役して、爲さしむるにいふに用ゐる助動詞にて、次の三語あり。

「聞かす」「往なす」「居らす」。

「起きさす」「授けさす」「着さす」「爲さす」。

「聞かしむ」「居らしむ」「起さしむ」「爲しむ」。

動詞を使役相にいふに、自動には、その使役の**目的**をいふ語を要し、他動には、**標準**をいふ語を要す。

主人、客を往なす。 母子を起きしむ。

先生、弟子に道を聞かす。 學校、生徒に制服を着しむ。

以上の**勢相**使役相の助動詞は、全くその意義を變じて、動詞のあらはす動作を、單に敬ひ言ふ語とすることあり、こ

敬相

れを敬相といふ。その使役相の方は、連用法によりて、大抵「給ふ」おはすなどいふ動詞に連ねて用ゐる。

主上は御引直衣にて、腰輿に召さる。皇居の御固に清盛をば留めらる。御涙を流させ給ふ。性を柔和に受けさせおはします。おほやけも、行幸せしめ給ふ。

又、使役相に勢相を重ねて用ゐることあり、一層重き敬語なり。

聞かせらる。居らせらる。

起させらる。授けさせらる。爲させらる。

指定の助動詞

四、指定の助動詞。

事物を指し定むる意の助動詞にて、次の三語あり。  
指定解説する語にて、語原は「に、あり」の約なるなり。

べく、意義は「にて、あり」なり、「聞くなり」、「起くるなり」、「爲るなり」。この語は、又、獨立動詞の如く、直に名詞、又は、副詞、豆爾乎波にも付く、「月なり」、「われなり」、「宜なり」、それのみなり。

たり。語原は「と、あり」の約にて、意義は、亦「にて、あり」と指定する語なり、名詞の下のみにつく。「父たり」、「子たり」、「峨々たり」、「寂寞たり」。

べし。心に推量りて指定する意の語なり、「客往ぬべし」、「かれ居るべし」。又、強く指定して、命令する意をもなす、「よく聞くべし」、「夙く起くべし」。

打消の助動詞

五、打消の助動詞。

動詞のあらはす動作を打消すにいふ「おに用ゐる助動詞にて、次の三語あり。  
動作を、そのまま、に打消す語なり。「聞かず」、「起す」。

過去の助動詞

きず、授けず、着ず、爲ず、居らず。

この語は、その連用法にて、「あり」と連るときには、約りて、「ざり」となるを常とす。

まじ、推量りて打消す語にて、「ず」の豫定なり。「聞く

まじ、起くまじ、授くまじ、爲まじ、居るまじ。

まじに同くて、その意、稍強きが如し。「聞かじ、

起きじ、授けじ、着じ、爲じ、居らじ。

六、過去の助動詞

動作を、既往に就きていふに用ゐる助動詞にて、次の六語あり。

つ、動作の果て、止まる意をいふ。「聞きつ、起き

つ、授けつ、着つ、爲つ、居りつ。

ぬ、動作の往き畢れる意をいひて、略、つに同じ、聞

きぬ、起きぬ、授けぬ、着ぬ、爲ぬ、居りぬ。この語は、奈

present perfect

きけりぬ

る

未來の助動詞

present perfect

行變格のみには、絶えて連らず。

たり、て、ありの約れるなり。「聞きたり、起きたり、授

けたり、着たり、爲たり、居りたり。

せり、爲て、ありの意にて、動詞の如き力ありて、他の

動詞には付かず、甚餘の助動詞と異なり。「殿造せり、

勉強せり、軽くせり、明にせり。

けり、聞きけり、起きけり、授けけり、着けり、爲けり、

居りけり。

き、聞きき、起きき、授けき、着き、爲き、居りき。こ

の語は、加行變格、左行變格に連るに、異則あり。

七、未來の助動詞 動詞のあらはす動作の、未だ起らざる

を、豫めいふに用ゐる助動詞にて、次の二語あり。

む、聞きむ、起きむ、授けむ、

past

present perfect

推量の助動詞

む、着む、爲む、居らむ。  
けむ。過去の「けり、き」を未來にいふ語にて、過去に屬する動作の、分明ならぬに用ゐる。「聞きけむ、起きけむ、授けけむ、着けむ、爲けむ、居りけむ」。

八、推量の助動詞

動詞のあらはす動作を推量する意をいふに用ゐる語にて、次の四語あり。

らむ。未然を推量する語なり。「聞くらむ、起くらむ、

授くらむ、着るらむ、爲らむ、居るらむ」。

めり。「見え、あり」の約れるにて、事物の動作、然見ゆ、と

推量する意をいふ語なり。「聞くめり、起くめり、授く

めり、着るめり、爲めり、居るめり」。

まし。未來を推し定め、又は、然せむとする意の助動

詞なり。「聞かまし、起きまし、授けまし、着まし、爲ま

轉三才  
思  
良  
授  
調

し、居らまし」。

らし。軽く推量する語なり。「聞くらし、起くらし、授

くらし、着るらし、爲らし、居るらし」。

詠歎の助動詞

九、詠歎の助動詞

動詞の、動作を言ひ終へたるに、感情を

添ふる語にて、次の一語あり。

なり。「起くなり、授くなり、來なり、爲なり、往ぬなり」。

比況の助動詞

十、比況の助動詞

比ぶる意をいふ語にて、動詞、形容詞、助

動詞に添ひ、又、互爾乎波の「が」の下にも用ゐること、他の

助動詞と異なり。次の一語とす。

ごごし。「聞くごとし、起くるごとし、なきごとし、逢へ

りしごとし、山のごとし、空しきがごとし」。

第三節 時

時

現在

過去

半過去

右の例にて、「聞く、起くる」はその動作の最中なるをいひ、「聞きつ、起きし」はその動作を既往に就きていひ、「聞かむ、起きむ」はその動作を未然に就きていふ。かくの如きを、動作の時といひ、これを現在、過去、未來の三種に別つ。

一、現在

現に、今、動作するをいふ。

道を聞き、起くる者。業を授けらる。爲しむる事。

二、過去

これに、半過去、過去、大過去の三様の別あり。

その一、半過去。動作の方に終りたるをいふにて、「つ、ぬ、

たり」の三助動詞を用ゐ、又、獨立に、「せり」を用ゐる。

道を聞きつ。起きぬる者。業を授けられたり。

過去

大過去

*present perfect + past = past perfect*

爲しめたる事。

勉強せり。及第せる人。賞を重くせり。志とせり。

別に、一種の半過去ありて、四段活用 of 動詞に限り、その

「咲く、指す、勝つ」などを、「咲きて、あり、指して、あり、勝ちて、

あり」などの意にて、「咲けり、指せり、勝てり」など、轉じ用

ゐる。その活用 of 状態は、略「あり」に同じ。

その二、過去。動作の過ぎて程歴しをいふにて、助動詞

の「けり」と「き」とを用ゐる。

道を聞きけり。起きし者。業を授けられける時。

賞を重くせしめき。

その三、大過去。過去より、一層程歴たりしをいふにて、

半過去と過去との助動詞を重用す。

道を聞きてけり。起きてき。業を授けられにけり。



未來

賞を重くせしめにき。着たりけり。往にたりき。  
團居せりけり。志とせりき。

三、未來。未だ起らぬ動作を豫めいふにて、助動詞の「む」を用ゐる。

道を聞かむ。起きむ者。業を授けられむ。爲しめむ事。

以上の現在過去未來共に、動作の時をいふにはあらで、一轉して、別に、現在は事實の常に然るをいひ、過去は語氣に念を推して言ふ意をなし、未來は事實の分明ならぬにいふことあり。

日は東より出づ。秋は來にけり。或は然らむ。

又、その動作は過去に屬すれども、未だ分明ならぬときに、或はその動作は未來に屬すれども、既に分明なるときに、いづ

れも、過去を未來にいふことあり。これ、亦三様に分る。

一、半過去にては「つぬ」たりに「む」を重ね用ゐる。

聞きてむ。起きなむ。授けたらむ。

二、過去にては「けむ」を用ゐる。

聞きけむ。起きけむ。授けけむ。爲けむ。

三、大過去にては「つぬ」たりに「けむ」を重ね用ゐる。

聞きてけむ。起きにけむ。授けたりけむ。

○

次の諸例の中にて、助動詞を求めて、その意義と用法とを説明せよ。

例 後徳大寺大臣の寢殿に、鳶居させ（第一終止法）

て、繩をばら（敬相）たり（天過去、連體法）ける（こと）を、西

勢相第二轉半過去第二轉過去第四轉

使役第一轉打消第一轉

（第一終止法）

行が見て、その後ば、まるらざ（スーア）りき（連用法）（第一終止法）

（中止法）

一、内裏をば清盛などに守護せさせられ候へ。

二、判官も軍の奉行を仕らせらるゝ上は、先陣をばわれこそ驅けめ。

三、源氏は、たれかは知らぬ清和天皇より爲朝までは九代なり。

四、あさましかりつる夏も暮れて、秋にも既になりにけり。

五、駒を留めてかへり見る、故郷を雲や隔つらむ。

六、遊子なほ残月にゆきけむ、函谷の有様おもひ出でらる。

七、時や到らざりけむ、忠孝の道こゝにてきはまりにき。

八、苦の下に埋れぬものとは、唯徒に名をのみぞ留めし。

九、子どもを成人せさせて、人数に思はれ奉るこそうれしけれ。

十、日敷のはやく過ぎぬるほどぞ、物にも似ぬ。

十一、今こそ、この天皇疑なき繼體の正統に定らせ給ひぬれ。

十二、御みづから旗の銘をかゝしめ給ひ、さまざまの兵器をさへ下し給ひぬ。

十三、一國の内みな國命の下にて治めし故に、法に背く民なかりき。

十四、かの尊氏御方にまゐれりしその功は、まことにしかるべし。

十五、命にかはりてうたれし者の子なれば、かたみともこそ思ふべけれ。

十六、夜晝三日に、山城の多賀の郡なる有王山の麓まで、落ちさせ給ひけり。

十七、花橘は名にこそおへれ。なほ梅の匂にぞ、いにしへの事も、立か

へり戀しう思ひ出でらるゝ。

十八、主上遂に御許されもなくして、かの經を、即ち返しつかはさる。

十九、くすしの許にさし入りて、對ひ居たりけむ有様、さこそ異様なり

けめ。

二十、おのれが年ごろ使ひつる従者の童、すでに逃げにけり。尋ねて

捕へて得させよ。

廿一、おもふに、たゞ頼朝が如きもの、弟たらむこと、最難しといふべ

きなり。

廿二、はからざるに病をうけて、忽にこの世をさらむとする時にこそ、

過ぎぬるかたのあやまれる事はしらるなれ。

廿三 世の中に、その比、人のもてあつかひぐさにいひあへる事、いろふべきにはあらぬ人の、よくあないしりて、人にも語りきかせ、とひき、たるこそ、うけられね。

廿四 しやせまし、せずやあらましとおもふ事は、おほやうはせぬはよきなり。

廿五 百薬の長、とはいへど、萬の病は酒よりこそおこれ。憂を忘るといへど、酔ひたる人ぞ、過ぎにしうさを、思出で、なくめる。

廿六 この海のまゝに廻りて寄せば、日ごろ經なむ。その間に逃げもし、また寄せられぬかまへもせられなむ。

廿七 柱よりかゝぐりおる、ものあり、あやしくて見れば、伴大納言なり、次に子なる人おる、また次に雑色とよ清といふものおる。

廿八 よろづに見ざらむ世までをおもひおきてむこそ、はかなかるべけれ。

廿九 夕月夜、しほみちくらし、難波江のあしのわか葉をこゆる白浪。

三十 昨日こそ早苗取りしか。いつのまに、稻葉をよぎて秋風ぞ吹く。

第四節 助動詞の誤。

次の各動詞に、所相、使役相、半過去の三助動詞を、順次に連ね添へて、二種の終止法を作れ。

一 逃ぐ。 勝つ。 乗る。 捕ふ。 任す。

二 教ふ。 恨む。 愛す。 信ず。 發布す。

次の各動詞に、勢相の助動詞と、指定の「なり」と、未來の「む」とを、順次に連ね添へて、三種の終止法を作れ。

三 起く。 勝つ。 作る。 思出づ。 及第す。

次の各動詞に、使役相、所相の二助動詞と、指定の「べし」とを、順次に連ね添へて、その連體法を用ゐたる文を作れ。

四 行く。 攻む。 下る。 射る。 來。 討議す。

次の諸動作を、助動詞を用ゐて、各敬相にいへ。

五 主上、詔る。 上皇、隱岐に遷さる。 皇孫、降誕あり。 殿下、臨場すべし。

六、判官與一に扇を射さす。先生來たり。主人は賛成しき。  
父、上京せむ。

次の語に、指定の助動詞を添へて、各、その第一終止法と連體法とを作れ。

七、忠臣。父。生徒。堅牢。爛漫。  
八、赫々。子。清潔。東京。北京。

次の語ともに、(一)打消の助動詞、(二)推量の助動詞、(三)指定の「べし」、(四)比況の助動詞を、一つ一つ添へて、三種の終止法を作れ。

九、知る。流る。覺ゆ。來。旅す。

十、行はる。心得。言はしむ。熱心なり。

次の動作の八様の時(現在、半過去、過去、大過去、未來、半過去の未來、過去の未來、大過去の未來)を、三種の終止法と、連體法とに用ゐて、文を作れ。

十一、咲く。老ゆ。明く。試る。來。

十二、御座す。欲す。示す。祝す。當選す。

十三、死ぬ。あり。爲らる。待たる。入らす。紳士たり。

次の諸例の誤を正せ。

例、かれは笈を負ふて、帝都に出てり。

「負ふ」は波行四段活用にて、半過去の助動詞「て、つ、つる、つれ、てよ」に接するには、その第二轉を用ゐて、「負ひて」とすべく、音便にては、「負うて」とすべし。

「出てり」は、「出づ」の半過去の如くなれど、「出づ」は下二段なれば、かくは用ゐられず。「出てたり」など、正すべし。

十四、物理學教室にて、無線電信を實驗し、結果は良好なりし。

十五、醫術の進歩するに隨いて、不治の症と信じられし病も、多く癒えり。

十六、過日召集されし村會は、今日豫算を議するべし。

十七、多年實業に力を盡せし某氏は、勳功によりて、特に華族に列され

- 十八 某博士は、第十九世紀の文明に就ひてなる演説を、大喝采の裡に終れり。
- 十九 將軍老えり。されど、意氣の壯なるは少年に耻づるまじ。
- 二十 昔劉備なる英雄は、日月流る如し、老將に至らむと歎きける。
- 廿一 出師表を讀むで、泣かん者は忠臣にはあらずとぞいはる。
- 廿二 われこそ、この重に案内させて、嚮導せむ。人人つゝひて來よ。
- 廿三 身のまはりのいと質素にて、よろづ華美ならんはゆかしきものなれ。
- 廿四 女は口おもく、問われん限は、いはんこそ願はしかるべき。
- 廿五 物こそ得いはず、畜生とても痛苦をば感ずるを、誰れか意に任して、かくは打た、きしき。
- 廿六 當事者は、遠き生徒に便利を得せしむ目的にて、この中學校には、寄宿舎を設けん計畫を立て居れり。
- 廿七 今日<sup>あんな</sup>は物うし、明日<sup>あんな</sup>こそせむ、などというて、徒に日を過せし昔こそ悔しかりき。

- 廿八 日英同盟の成立は、明治三十五年二月十二日、貴族院にて公にされ、わが國到るところ、官民のこれを祝さざるものなし。
- 廿九 只今、高松殿に押寄せ、三方に火を懸け、一方にて支へ候はむに、火を通れぬものは、矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を通るべからず。
- 三十 君のため世のため、なにかをしからぬすて、かひある命なりせば、次の漢文を、正しき國文に書き下せ。
- 一 富貴者安敢驕人。
- 二 陌頭楊柳枝、已被春風吹。
- 三 所謂君不君、臣不臣者也。
- 四 此不可使聞於隣國也。
- 五 有種首者、使備盜賊、則道不拾遺。
- 六 志不立、天下無可成之事。
- 七 菅原道真、歷事五朝、尤爲宇多帝所親任。
- 八 與之言、知其德性、因勸令游學、遂知名當世。

副詞

第六章 副詞。

副詞は、動詞に副ひ、或は、形容詞、又は、他の副詞にも副ひて、その意味を種種に修飾する語なり。例へば、只管考ふ、暫し留る、甚だ高し、いと遙に見ゆなどの如し。

名詞の轉じて副詞となることあり。例へば、

昔、男ありけり。明日、われ行かむ。

矢、一つ給はらむ。弓手の肘、馬手に四寸延びたり。

明治二十三年十月三十日、教育に關する勅語を賜ひぬ。

形容詞は、その副詞法にて、轉じて、副詞となること、既にいへり、善く改る、悪しくなる、疾く走る、心憂く思ふなどの如し。助動詞の副詞法は、その添へる動詞など、合ひて、熟語の副

詞を成す、花霞の如く見ゆ、猥に入るべくあ(カ)らず、行くまじく誓ふなどの如し。

副詞の疊語は、その意を深くす、例へば、ゆめく、いとく、ただく、なほくなどの如し、又、繰返す意を成すことあり、かくく、しかく、またくなどの如し。

他語の相熟して、副詞となることあり、敢へて、始めて、返りて、却、恐らく、は、請願はく、は、囊、譬へば、例、増して、況、言はむ、や、況、何處にぞ、焉などの如し。動詞は疊語となりて、副詞に轉じ、その動作作用を繰返す意をいひ、或はその意の深きをいふこと、行くく、代るく、増すく、益などの如し。

第一節 副詞の用法。

副詞は、その修飾する語の上に、直に居るを常とすること、前

の諸例に見ゆるが如し。されど、その語脈を紊さざらむ限には、間に他の語句を隔つることあり。例へば、

つらく、事の由を考ふ。 暫し、時の移るを待つ

の如く用ゐる。こは不可なけれど、

始めて、杜鵑の啼くを聞く。 遠く任に來る友を迎ふ。

など、用ゐては、その副詞はいづれを修飾するか、明ならねば、

非なり、杜鵑の始めて啼くを聞く、杜鵑の啼くを始めて聞く、

任に、遠く來る友を迎ふ、任に來る友を遠く迎ふなど、その意

に因りて、用ゐる分くべし。 又、

よく、かれを召して、諭す。 たまく、知れる人に遇ふ。

などは、よく、諭す、たまく、遇ふなど、連ね用ゐるを可とす。

「遙に、明に、靜に」など、「に」に終る副詞は、動詞の「あり」と連ると

き、常に約りて、遙なり、明なり、靜なりとなる、その語尾を轉

ずる状は、略、ありに同じ。かゝる副詞は、又、その修飾すべき動詞ありを略して、中止法に用ゐられ、末なる同趣の語に照應することあり。

山、紫に(アリ)、水明な(ニ、ア)リ。

月、明に(アリ)、星、稀に(アリ)、鳥鵲南に飛ぶ。

又、尙、暫し、待つ、嘗て、屢見たり、淺く、廣く、掘るなど、重用する

は、二つの副詞、共に下の動詞を修飾す。

禁止の意をなす副詞にて、動詞の下に居るものあり。

行くな。 起くな。 隔つな。 來な。 爲な。 居るな。

この語は、必、動詞の第三轉に連る、但し、良行變格にのみは、第四轉に連る。 又、なを上に置き、下に、「そ」といふ語を添へて、中に動詞を挟みて、禁止の意を成すことあり。

な行きそ。 な起きそ。 な隔てそ。 な居りそ。

明、靜、名  
厚、  
山、  
鳥、  
既、  
例、

な來そ。 な爲そ。

この語は動詞の第二轉を挾むを、通則とす、但し、加行變格、佐行變格にては、その第一轉を挾む。この「な」を略して、清き月夜に、雲たなびきそ、など、用ゐるは、非なり。

第二節 副詞に屬する接頭語、接尾語。

副詞に屬する接頭語

本來の副詞に屬する接頭語は、あらず、他語の轉成したる副詞には、接頭語を伴ひたるもあり。

小暗く。 諸共に。 彌高く。 相構へて。  
け疎く。 た易く。 か弱く。

副詞に屬する接尾語

他語に接して、副詞とする接尾語の著きは、次の如し。  
に。 常に、時に、誠に、切に、深切に、專一に、思ふに、

昔ふかり  
の山柳北のふ

亂りに、憂、頻に、欲しい儘に、悉、口口に、思ひく、に、樂しげに、この「に」は、遙に、明に、靜に、などの「に」と異なり、遙になどは、「に」を離して、遙のみにては、獨立の品詞に用ゐられざるに、こは、常、時、誠など、獨立の品詞なるにて、思ひ分くべし。

こ。 「ほとくと」と、からくと、むづと、赫々と、肅肅と、揚々と、悠然と、自若と、

ながら。 「ソノママ、ソレゴメニ」の意なり。「宵ながら、六人ながら、御簾の内ながら宣ふ」。

意義、一轉して、つつなどの意を成す、歩みながら見るの如し。又、一轉して、なれども、の意を成す、さりながら、しかしながら、

ものから、ものの。 「ものなれども」の意なり。「身に



寒くあらぬものからわびしきは、人の心のあらしな  
りけり。

すがら。 「さながら」の約れるなり。「路すがら」「夜すが  
ら」。

あ

がてら。 事の彼此に渉る意をなす。「秋の野も見た  
まひがてら、雲林院に詣でたまへり」。

がてに。 「難クアル」意をなす。「わが宿に咲ける藤波、  
立ちかへり、過ぎがてにのみ、人の見るらむ」。

からに。 「故」の意を成す。「逢坂や、木末の花を吹く  
からに、あらしぞ霞む、關の杉むらさるからに」。

み。 「からに」に似て、形容詞の語根にのみ付く。  
「里遠み、春深み、瀬を速み、苦を粗み、(を)は感動詞な  
り」。

ごごに。 物事の重ねて然る意、各然る意をなす。「人

ごとに語る、年ごとに咲く、咲くごとに見る」。

まにまに。 「儘に儘に」を約めたる語なり。「神のまにま  
に」語るまに、「欲しきまに」。

ばかり。 「程」の意を成す。「三年ばかり歴て、かくばか  
り」。

がり。 「の許へ」の意なり。「友がり行く」。

なご。 一に定めず、大略に指示す意をなす。「何事  
ぞなど問ふ、行くべしなど言ふ、馬になど乗る」。

○ 次の諸例の中にて、副詞を求めて、その修飾せる語と併せ  
てこれを擧げ、接頭語、接尾語とは、特に標示せよ。但し、あ  
るべき位置を誤りたる副詞は、これを正すべし。

つもかり  
かほかり  
かほかり  
かほかり

例。敵ながら、その恩を報ぜむとする人は、やがて彼の手に屬しけり。

敵ながら、  
「報ぜむ」を修飾す。

やがて、  
「屬し」を修飾す。

一。月ばかりおもしろきものはあらし。

二。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。

三。二月二日風雨やまず、ひと日夜すがら、神ほとけを祈る。

四。むかし、人を選び用ゐられし日は、まづ徳行をつくす。

五。われ屢かつて汽車に乗合ひし某軍人にあへり。

六。年月経ても、露わする、にはあらねど、その際ばかりは覺えぬにや。

七。いたりて思なる人は、たま／＼賢なる人を見て、これを憎む。

八。汝等軍人ゆめ、この訓誡を等閑にな思ひそ。

九。常に父母の諭したまふ教を守りて、決して背くことあるべからず。

探り入るるからず  
探り入るるからず

十。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。

十一。昨日、花見がてら、昔物語をなど聞かむと、田舎なる祖母がり訪ひけり。

十二。さ候へばこそ、世にありがたき物には侍りけれとて、いよく秘藏しけり。

十三。たとひ耳鼻こそきれ失すとも、命ばかりは、なか生さざらむ。

十四。あれたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂しめやかにうちかをりぬ。

十五。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたきこと多し。

十六。や、春深く霞わたたりて、花もやう／＼けしきだつ程こそあれ、をりしも、雨風うちつゞきて、心あわた／＼しくちりすぎぬ。

十七。内のさまはいたくすさまじからず、心にく、火はあなたにほの

かなれども、きらなど見えて俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう、すみなしたり。

十八、水車をかけたりけるに、大方めぐらざりければ、とかくなほしけれど、終にまはらで、いたづらにたてりけり。

十九、むかしおもふ草のいほりの夜の雨に、なみだなそへそ、山ほと、ぎす。

二十、吹くからに秋の草木のしをるれば、うべ、山風をあらしといふらむ。

第七章 接續詞

接續詞

接續詞は、並びたる同趣の文、又は、句の間に入りて、上下を續ぎ合はする語なり。例へば、山又山を越ゆ、書を讀み、且、字を習ふなどの如し。

接續詞は、他の語より轉じ成ることあり、その熟語なるもの

特に多し、及び、并に、尋で、故に、或有謂は、かくて、而(然)して、もしくは、されば、されど、なかんづく(就中)などの如し。

次の諸例にて接續詞を求めて、併せて、その接續せる語をも舉げよ。

一、本校は本科生及び選科生を募集す、入學志望者は、願書并に履歴書を出せ。

二、山へもかへらせ給はず、また御庵室へも入らせおはしませず。

三、麓には、一つの柴の庵あり、すなはち、山守が居るところなり。

四、一錢かろしといへども、これをかさぬれば、まづしき人を富める人となす、されば、商人の一錢を惜む心切なり。

五、或は高峯の雲に枕を歇て、苔の蕙に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。

六、日本國若くは大不列顛國に於て、上記の利益が危殆に迫れりと認むる時は、兩國政府は相互に、十分に且つ隔意なく、通知すべし。

互爾乎波

第八章 互爾乎波

互爾乎波は他の語と語との關係を示す語なり、例へば、

山里は秋こそ殊に侘しけれ、鹿の鳴く音に、目をさまし  
つづ。

互爾乎波は、獨立して用ゐられず、その用法によりて、あらゆる互爾乎波を、名詞にのみ屬くものと、種種の語に屬くものと、動詞にのみ屬くものと、の三類に大別す。

第一節 名詞にのみ屬く互爾乎波

第一類  
名詞の互  
爾乎波

以下の互爾乎波は名詞にのみ屬く、これを第一類とし、名詞の互爾乎波と稱すべし。

が。 誰がいふ、鳥が鳴く、書見る事が樂し。  
の。 秋風の吹く、雁の鳴くなり、古への戀し。

この二語は、共に、上には名詞を承け、下は、動詞又は形容詞に係り、その動作を起し、又は、有様を呈する名詞を特に舉げ示す。

の。 人の物、櫻の花、越の白山、富士の山、花の顔。  
が。 君が代、梅が香、蝦夷が千島、佐渡が島、父が倂あり。

この二語は、共に、名詞と名詞との關係を示す。

この「の」を連體法の動詞、形容詞、助動詞と、名詞との間に用ゐて、「道を學ぶの輩、舵無きの舟、習はしむるの室」といふは、避くべし。

つ。 天つ風、外つ國、沖つ白浪、濔つ串。

この語は、「の」に似て、上下の語の係屬を示すものなり。

に。 人に與ふ、都に住む、山に近し、水湯になる、道に

聽く、花見に行かむ、われに優る。

この語は、動詞の動作の移り、形容詞の有様の係るべき名詞を示す。

この語は、又、半過去の助動詞「つ」の第二轉なる「て」と重りて、「にて」となり、一種の豆爾乎波として用ゐらる。

京にて遇ふ。筆にて書く。

「にして」も、この種の豆爾乎波なり。

遂に攝州湊川にして、討死仕り候ひ畢んぬ。

書を讀む、水を飲む、身を修む。境を出づ、國を去る、路を行く、門を過ぐ。

この語は、動作の目的又は標準たる、名詞を示すものなり。

「これと思ふ、われ、汝とかれを訪はむ、露と消ゆ、

ありとある物」

これ、差抑へていふ意の豆爾乎波なり。この語は、また、

一句一文を名詞と見て、動詞、形容詞、助動詞の終止法、或は命令法等の、意の切る、所を承く。例へば、

春來といへば。憂しと見し世。われ落ちにきと人

に語るな。人目も、草も、かれぬと思へば。

人やあると召さる。春や疾き、花や遅きと聞き分か

む。幾代か經しと問はまし物を。

かくこそ思ひしかと言ひけるを。共にこそ花をも

見めと待つ人の。

誰れ見よと。疾く行けと。

この語は、又、相並ぶ同趣の語句を接續するに用ゐられ、全く上の語に附着して、更に下、他の名詞の豆爾乎波に

接す。

月と花との遊。内と外とにあり。見る事と、聞く事とは相違せり。國語と漢文とを學ぶ。

かく用ゐる時は、この語を、その接續する同趣の語句毎に、幾處にても加ふるを則とす。

第五年級生徒と、第四年級生徒の總代に謀る、

など、いひては、この「と」は、前條の「と」にて、共に「の」意なるか、又「總代」は兩級生徒の「總代」なるか、或は「第四年級」のみの「總代」なるか、分明ならず。必、第五年級生徒と、第四年級生徒との「總代」或は「第五年級生徒と、第四年級生徒の總代」と、いづれにか、用ゐる分くべし。

この語も、亦、「こて」、「こして」といふ熟語の互爾乎波を成す。

さりとして。花見にとて、出で立つ。書を讀まむとて、

机に凭る。一人として、背く者なし。

へ。右へ向く、前へ進む、岸へ泳ぐ。

この語は方向を示す。これを、前の地位を示す「に」と混用するは非なり、住む館より出で、舟に乗るべき處へ住む館より出で、舟に乗るべき處へわたるなど、用ゐる分くべし。

より。人より受く、今より後、それより程歴て。

から。明日からは若菜摘まむと。出登良

この二語は、共に、二つの間に移り行く意を示す。

「より」は、又意義、一轉して、相比べて科をいふ意に用ゐらる。

かれより後る。山より高し。

まで。「都まで送る、吾のむす時まで」。

種種の語に  
屬く豆爾乎  
波

第二類

この語は、至り及ぶ意の豆爾乎波なり。

第二節 種種の語に屬く豆爾乎波。

以下の豆爾乎波は、上に、各種の語を承けて、その意を、下なる動詞、形容詞、助動詞に通ず、これを第二類とす。

○は。

「人は去り、われは留る、見る事はよし、樂しくは思ふ、取りては見む、然はあれと、君とは知らず、京へは行かむ。」

これ、事物を、各自に差別する意の豆爾乎波なり、但し、一を擧げて、その他を曉らしむるもあり。

茶をば飲めども、酒をば飲まず。これをば取らむ、かれをば捨てむ。

右の「ば」は、音便にて、濁りたるなり。

へも。

「われも行き、人も行く、行く者もあり、歸る者もあり、長きものも、短きものもあり、善くも悪しくも、なし、人をも身をも恨みざらまし、われにも許せ、家へも歸らず、水だにも飲まず。」

この語は、同狀の事物を并列する意をいふ、亦、一を擧げて、他を曉らしむることあるは、右の例に見ゆるが如し。

「花ぞ落つる、早くぞ過ぐる、去年よりぞ見し。」

ぞ。

「人をなむ恨むる、かくなむある。」

共に、多くの中にて、一つを指す意をいふ、但し、なむは意稍、緩し。この二語、文中にあれば、その文を結ぶ動詞、形容詞、助動詞に、第二終止法を用ゐる。

「ぞ」は、又、指示す意にて、文句の末に着くことあり、その動詞の下に着くときは、その第四轉に接し、形容詞には第

第二類係

々

三轉に接す。助動詞に接するにも、これに準ず。  
然おぼゆるぞ。無きぞ。ありしぞ。讀みたるぞ。

身にしあれば、必しも然らざらむ。

これも、指す意ありて、力ある亘爾乎波なり。

こそ。花こそ咲け、かくこそあれ、月をこそ見れ。

多くを捨て、一つを取る意の亘爾乎波にて、その文中

にあるときは、その文を結ぶ動詞、形容詞、助動詞に、第三

終止法を用ゐる。

だに。松の雪だに、消えなくに、露をだに厭ふ。

すら。蟻すら遠き慮あり。

この二語、意粗同じ、事物の輕きを舉げて、その餘の重きを、言外に引證する亘爾乎波なり。

さへ。月清く、風さへ涼し、敵をさへ感ぜしめたり。

算段係  
ソレの意  
算段係

ok ok ok

重きが上に、又、添ひ加る意をいふ。「だに」は輕き客を舉げて、重き主を引證し、「さへ」は重き主を舉げて、輕き客を引證す。

月をだに、あかず思ひて、寐ぬものを、郭鳥さへ鳴きしきるかな。

のみ。「われのみ知る」「思ふのみなり」「家にのみ居て」。

ばかり。「わればかり知る」「家にはかり居て」。

この二語、意粗同じく、一ありて、二無き意をいふ。

や。「春や來る」「行かやあるべき」「花をや見つる」。

か。「たれかある」「何とかすべき」「いかにかせむ」。

この二語、共に、指して疑ふ意をいひ、その文中にあるときは、その文を結ぶ動詞、形容詞、助動詞に、第二終止法を用ゐる。

ヨキ

や  
か

重き  
輕き



この二語又、文句の末に着きて、疑ひ、又は、問ふ意をなす  
ことあり。

ありや、なしや、來むや、來じや、  
か、峯の嵐ナルか、松風ナルか、  
生きたるか、死ぬる

二語、共に、一種の用法に因りて、疑ふ意の裏返りて、確定  
の意となることあり、これを反語といふ。

そこひなき淵やはさわく、山川の淺き瀬にこそあだ  
波は立て、悦ばしからずや、

かはるは人の心のみかは、さる理のあるべきか、

この二語の、動詞、形容詞を承くる時は、やは、必、動詞の第  
三轉と、形容詞の第二轉とを承け、かは、必、動詞の第四轉  
と、形容詞の第三轉とを承くるを法とす、助動詞を承く  
るにも、これに準ず。

又、上に、他の疑辭あるときは、その下には、かを置けども、  
「や」を用ゐることなし。

して、「幼くして賢し、人をして送らしむ」。

この語は、佐行變格の「す」の第二轉と、半過去の「つ」の第二  
轉とにて成り、その意は失せて、熟語の互爾乎波となれ  
るものなり。

第三節 動詞にのみ屬く互爾乎波。

以下の互爾乎波は、上、下、共に、動詞、或は、形容詞、助動詞に接す、  
これを第三類とし、動詞の互爾乎波と泛稱すべし。

ば、「年、歴れば、齡は老いぬ、人衆ければ、天に勝つ、（既  
定）「櫻花散らば、散りなむ、虎穴に入らずば、虎兒  
を得じ、」未定。

第三類  
動詞の互爾  
乎波

既定  
未定

この語は二つの語句を連絡して、一は原因となりて、他は、その當然の結果を成す意をいふ。これに既定と、未定と、二様の用法ありて、既定の意を成すには、動詞の第五轉と、形容詞の第四轉とに接し、未定の意を成すには、動詞、形容詞の第一轉に接す、助動詞に接するにも、これに準ず。

い<sup>ク</sup> 繪にかくと、筆も及ばじ。

こ<sup>ク</sup>も 萬代歴とも、色はかはらじ、難くとも、遂げむ。

い<sup>ク</sup>も 問へど答へず、惜しけれど、捨つ。

い<sup>ク</sup>も 酌めども、盡きず、長けれども、切らず。

この四語も、亦、共に、二つの語句を連絡すれども、一の語句は原因を成して、他はその反對の結果を成すをいふ。「と」ともは、動詞の第三轉と、形容詞の第一轉とを承けて、

未定  
既定

未定の意を成し、「と」ともは、動詞の第五轉と、形容詞の第四轉とに接して、既定の意を成す、助動詞に接したるときも、これに準ず。

この「とも」とも「の」ともを省きて、「も」のみを用ゐて、

耻を受くるも、耻とせず。年を歴しも、成らざりき。

など、いひては、意を成さざれば、避くるを要す。

以上の「ば」とも「ど」とも、動詞、形容詞、助動詞に連続する状は、第七表を參見して、知るべし。

に 日暮れかゝるに、宿るべき所なし。

を 夏の夜は、まだよひながら、明けぬるを、雲のいつ

こに、月宿るらむ。

が 屢訪ひたるが、面會するを得ず。

この三語は、共に、二つの語句を連絡して、事の裏反る意

または、案外に出づる意をいふに用ゐ、その意稍「ど、ども」に似たり。この三語は、動詞の第四轉、形容詞の第三轉に接す、助動詞に接するにも、これに準ず。

で。 「行かであり、色見えて、うつろふ」。

この語は、打消の助動詞の「ず」と、半過去の助動詞「つ」の第二轉「て」を、一語に約めたるにて、動詞、助動詞の第一轉に付くこと「ず」に同じ。

つ。 「行きつゝ見る」讀みつゝ書く」。

この語は、半過去の「つ」を重用したるにて、この事をしながら、かの事をもする意をいふ。

○ 次の諸例の中にて、豆爾乎波を求めて、その承接する語句をも併せ擧げよ。

例 金はすぐれたれども、鐵の益多きにしかず。

は、 第二類「金」と「すぐれ」とを承接す。

ども、 第三類「金はすぐれたれ」と「鐵の益

多きにしかず」とを接続す(既定)。

に、 第一類「多き」の下に畧せられたる

「事」と「しか」とを承接す。

一、 よろづの病は酒よりこそおこれ。

二、 酒と煙草とは養生に害あり。

三、 病をうくることも多くは心より受く。

四、 おのれを知るを物知れる人といふべし。

五、 分をしらすしてしひてはげむは、おのれがあやまりなり。

六、 かしこげなる人も、ひとの上をのみはかりて、おのれをば知らざるなり。

七、 一錢かるしといへども、これを重ねれば、貧しき人をとめる人と

短慮を味

- 八 月日經て空は晴れぬれども涙の袖はかわきだにせず。
- 九 その忠烈の氣天地にふさがるとやいふべからむ。
- 十 桃李の言はねばたれと共に昔を語らむ。
- 十一 萬のはかなき業すら物の上手はそのすちにつけてはいと高き心ばへあるものなり。
- 十二 老いたる親をもふり捨て、悲しき妻をも別れつ、奥州平泉の館にして最後の伴をしたりしも情あることいぞ聞えし。
- 十三 その比の物がたりには萬のところこれをかたりてなむみな人ほめけるとなむ語り傳へたるとなり。
- 十四 急がすばぬれざらましを旅人のあとよりはる、野路のむら雨
- 十五 名にし負は、いざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと。
- 十六 玉の宮居はあれはて、雨さへ露さへいとしげ、れど民の竈の賑は立つ煙にぞ知られける。

形容詞		助動詞		推	未	過
久志幾 志久志幾		指	比	去	來	去
第一轉	よ(善)く あ(惡)しく	べく ごとく まじく ……	……	……	……	な たら せら
第一轉	よく あしく	べく …… まじく ……	……	……	……	ぬ たり せり けり む けむ らむ
第四轉	よけれ あしけれ	べけれ …… まじけれ …… しか	……	……	……	ぬれ たれ せれ けれ め けめ けめ らめ

形容詞と活用の形容詞に似たる助動詞と

表中、×印ある三助動詞、「め」「けめ」「らめ」は、「も」「ごも」には連れど、「ば」には連らず。

第七表。

動詞、形容詞、助動詞と耳爾乎波の  
「ば、ども、ごも」の連續。

未定 未定 既定

動詞と活用の動詞に似たる助動詞と

		助動詞										動詞										
		推	未	過	打	指	使役	勢	所	良行	奈行	佐行	加行	下	上	下	上	四				
		量	來	去	消	定	相	相	相	變格	變格	變格	變格	一段	一段	二段	二段	段				
第一轉	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	第一轉			
第三轉	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	第三轉			
第五轉	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	第五轉			

形容詞と活用の形容詞に似たる助動詞と

第一轉

第三轉

第五轉

第七表。

動詞、形容詞、助動詞と「ば」の連続。  
「ば、ごも」「ごも、ごも」の連続。

未定 未定 既定

		助動詞										動詞									
		推	未	過	打	指	使	勢	所	良	奈	佐	加	下	上	下	上	四			
		量	來	去	消	定	相	相	相	行	行	行	行	一	一	二	二	段			
		格	格	格	格	格	格	格	格	格	格	格	格	段	段	段	段	段			
形容詞と活用の形容詞に似たる助動詞と	第一轉	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……			
	第三轉	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……			
	第五轉	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……			

表中、×印ある三助動詞「め」「けめ」「らめ」「は」「ごも」「ごも」には連れど、「ば」には連らず。

榮小春

雙崎源谷圃仙傳の五爾乎波の

朱神宮新刊の朱神宮の御書

助動詞	打	宿	使	所	行	行	加	下	上	上	上
	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿
	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿
	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿
	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿
	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿
	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿
	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿
	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿
	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿

第四節 五爾乎波の誤。

次の諸語に「ば」とも、「ど」ともを付けて、各その未定と既定との意をいへ。

例 落ちぬ。

落ちなば、落ちぬとも、

(未定)

落ちぬれば、落ちぬれど、落ちぬれども、(既定)

- 一、 散る 老ゆ 過ぐ 見ゆ 眺む
- 二、 見る 來 爲 死ぬ あり
- 三、 欲す 譯す 問はる 教へらる 讀ます
- 四、 答へさす 言はしむ 才子なり 大將たり 咲かず
- 五、 書きつ 行きぬ 勉めたり 高し 美し
- 六、 食ふべし あるまじ 思ひき 多かり 明なり

次の諸例に誤あらば、正して、その由を述べよ。

七. いかにかこの問題を解決すべきやと、議長は委員へ諮問せり。  
 八. 公園へ行きて、高等學校と、わが校の選手の野球の仕合を見む。  
 九. この青色券を持參せば、特別席にて縦覽するを得ると、ある役員に聞けり。  
 十. 日はなほ高きも、汽車へこそ乗らむと、道を右へ取りて、いそぎぬ。  
 十一. 三日飼はれば、犬さへ恩を知るといへば、かれらは、禽獸にも耻づるの人といふべし。  
 十二. 舊主の戀に訪はせらるゝさへあるに、種種の賜を下させらるゝは、おほけなき光榮といふべくや。  
 十三. かれはその品に見覺あるや否やを答へさゝれたるも、黙して言はざりき。  
 十四. わが友は美術學校へ入るの目的にて、上京し、も病を得て歸郷せしとぞ。  
 十五. かれとこれの大きと價は相同じきも、これなむ善けれとて求め來れり。

使わぬもの  
 下させ  
 ある  
 下させ  
 下させ

次の漢文を、正しき國文に書き下せ。  
 十七. 運之愛、同予者何人。  
 十八. 進亦憂、退亦憂、然則何時而樂耶。  
 十九. 夫有報人之志、而不能下人者、是匹夫之剛也。  
 二十. 今有尾生、孝己之行、而無益成敗之數、大王何暇用之乎。  
 廿一. 觀夫高祖之所以勝、項籍之所以敗者、在能忍與不能忍之間而已矣。  
 廿二. 大凡君子、與君子以同道、爲朋、小人與小人、以同利、爲朋、此自然之理也。

第九章 感動詞。

感動詞は、喜怒哀樂等、凡そ、人情感動する所あるに發する聲なり。



あはれあはれわれに千年の命あらばゆづらまほしき  
山櫻かな。

感動詞は、泛く、種種の感情に通じていふあり、専ら、一感情に  
局りていふあり、而して、各、一定の慣用法あり。左に、著きも  
のを擧げて、その用例を示さむ。

他語の上に用ゐるもの。

あ、あ、かしこしや。

あら、無慚なりや。

あな、喜ばし、あな、かしこ。

あはれ、今年の秋も往ぬめり。

や、思ひ出したることの候ふ。

やあ、あれなるは、佐野の源左衛門常世か。

やよ、待て。

いかに、たれかある。

以上の四語は、呼び掛くるに發す。

いで、御消息聞えむ。

いざ、汲み見てむ。

あはや、事の爲りなむとするを見て發す、あはや、

法皇の流されさせおはしますぞや。

すは、警め告ぐるに發す、すはや、城の中より打

出でたるは。

他語の中間、又は、下に用ゐるもの。

や、咲くやこの花、長閑なりや、催し行はる、

さまぞいみじきや、行かばや、進めや、おも

しろや、何ぞや、いひきとかや。

も、移りも行くか、人の心の、いともしこし、

またも來む、惜しくもあるかな、忘れかね  
つも。

「そこひなき淵やはさわぐ、たれかは知ら  
ぬ、これ見よ、まことにおはしたるは。」

「香をだに匂へ、瀨を速み、八重垣つくる、そ  
の八重垣を。」 *ともおもしろ*

他語の下に用ゐるもの。

な。

「またもあれな、契りきな、面白のけしきや  
な。」

よ。

呼びかくる聲、月よ、花よ、わが子よ、行けよ、  
物を思ふよ、をかしさよ、頃かこよ。

か。かも。かな。

「行く人を招くか、野邊の花薄、三笠の山に  
出でし月かも、夜はの月かな、見ゆるかな。」

*ゆーう き  
なむ 感動*

*さめいしひ  
感動*

*なむ 感動  
なむ 感動  
なむ 感動*

が。がも。がな。

「老いず死なすの、薬もが、世の中は、常にも  
がもな、無くもがな。」 この三語は、共に、希  
望の意をいふ。

なむ。

この語は、希望し、又はあつらふる意をい  
ひ、動詞、助動詞の第一轉に添ふ、今一度の  
御幸待たなむ。

かし。

完結したる文句の後に、餘情に添へて、念  
を推す意なり、さばかりぞ、かし、見ゆ、かし、

あはれなり、かし、疾く行け、かし。

感動詞には、重用するもの多し、右に挙げたる、「やよ、かも、かな」が、「がな」など、その例なり、その他、「あなや、いざや、見せばやな」など、みな、これなり。

尋常の語も、感情に發して、感動詞となることあり、「こは、こは、そも、さて、もの如し。」

次の諸例の中にて、感動詞を求めよ。

- 一、 心だに誠あれば、何事も成るものぞかし。
- 二、 あはれ、この君を隠し奉りて、義兵をあげばや。
- 三、 平家は舩をたゝきて、女房も男房も、あ射たりと感じけり。
- 四、 や、おのれかくありけるは、たゞ來れ。
- 五、 はじめはつゝ、むわが宿の、さも見ぐるしく候へど、しばしはとまり給へや。
- 六、 〇あら、曲もなや、よしなき人を待ち申し候ふものかな。

かあし、  
悲し、  
可憐、  
可哀、  
可憐、  
可哀、  
可憐、  
可哀、  
可憐、  
可哀、

七、

大雪ふりて、寒かりしに、秘藏せし鉢の木を切り、火にたきあてし心をば、いつの世にかは忘るべきいで、その時の鉢の木は、梅櫻松にてありしよな。

八、

世の中は、常にもがもな、渚こぐあまの小舟の綱手かなしも。

第十章 温習雜題

次の諸文を解き、その各品詞に就きて、構成、用法、意義等を、詳に説明せよ。

例、 いかにかに、與一、あ、の扇の眞中射て、敵に見物せさせよ、かし。

いかにかに、 感動詞。

與一、 固有名詞。

あ、 指示代名詞(事物)、遠稱。

- の、扇、の、眞中、射、て、敵、に、見物せ、させよ、かし、
- 一、 國運の進歩、年年に著し。
- 二、 昔の世は今の御代に比ぶべくもなし。
- 三、 眞中、
- 射、
- て、
- 敵、
- に、
- 見物せ、
- させよ、
- かし、
- 三、 眞中、
- 射、
- て、
- 敵、
- に、
- 見物せ、
- させよ、
- かし、
- 三、 眞中、
- 射、
- て、
- 敵、
- に、
- 見物せ、
- させよ、
- かし、

三、 眞中、

射、

て、

敵、

に、

見物せ、

させよ、

かし、

三、 眞中、

射、

て、

敵、

に、

見物せ、

させよ、

かし、

- 三、 かの國の郡縣といふは、秦の始皇よりぞ始りし。
- 四、 人々の周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。
- 五、 夏の蟲は、冬の寒さを知らずとかや。
- 六、 木蔭にかたよりて、二つの茶屋のあとあり。
- 七、 をりふしのうつりかはるこそ、物毎にあはれなれ。
- 八、 小松が下に臥したる鹿の、いかなる夢か見るらむ。
- 九、 夜寒の風に、さそはれ來る空燒物の、にはひも、身にしむこゝちす。
- 十、 釣する小船の、漕ぎゆく有様、畫くとも、筆には及びがたし。
- 十一、 をりふし、北風烈しう吹きければ、磯打つ浪も高かりけり。
- 十二、 大路のさま、松たてわたして、花やかに嬉しげなるこそ、また、あはれなれ。
- 十三、 八重櫻は、奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ、世におほくなれる。
- 十四、 吉野泊瀬の花の色、須磨や明石の月影は、その里人知らざれども、

數奇たる人こそ知る習なれ。

十五 幸に、義平、源氏の嫡嫡なり、御邊も平家の嫡嫡なり、敵にはたれか嫌はむ寄れや、組まむ。

十六 弓矢の冥加あるべくば、扇を坐席に定めて給へ、源氏の運もきはまり、家の果報もつくべくば、矢を放たぬ前に、深く海中に沈め給へ。

十七 かつは、亡父の申し、遺言に違ひ、かつは、武略のいひがひなき謗におつべく覺え候ふ。

十八 いかにもあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふはまことか。なに、おびたしく上る。さぞあるらむ。

十九 明日は遠國へおもむくべしときかむ人に、心閑になすべからむ業を、人、いひかけてむや。

二十 大方、いける物をころしいためた、かはしめて、あそびたのしむは、畜生殘害の類なり。

廿一 此の頃ある、人の文だに久しくなりて、いかなるをり、いつの年な

りけむと、おもふはあはれなるぞ、かし。

廿二 人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず、されども、おのづから、正直の人などかなからむ。

廿三 ふるさとへ、歸るかりがね、さ夜更けて、雲路に迷ふ聲きこゆなり。  
廿四 和歌の浦にしほみち來れば、かたをなみ、葦邊をさして、田鶴なきわたる。

廿五 いろはにほへど、ちりぬるを、わがよたれぞ、つねならむ、うるのおくやま、けふこえて、あさきゆめみじ、あひもせず。

○ 次の諸文に誤あらば、正して、その由を述べよ。

一 かの君をぞ眞に學を好むの人といふべけり。

二 かれも及第し、由を、旅行中なる友に知らし、に、喜むで、直に歸り來れり。

三 われらに國語と英語の文法を授け給ひし先生は、今九州におはせり。

- 四 第一年級生徒は既に唱歌を始めりと思はれて、合唱の聲聞へ渡りぬ。
- 五 例の書店にて、かの雑誌を求めども、今朝までは残りありしにて、斷られぬ。
- 六 項羽は劍を習はさ、れたるも、成らず、書を學ばされたるも、亦成らざりき。
- 七 書は姓名を記すに足るのみなり、劍は一人にこそは敵せとぞ、いひき。
- 八 われはかれの保護をまかされたれば、力を盡して、その任を全ふすべし。
- 九 監督を嚴しふされば、恨み寛ふせられれば、侮るは小人の常なり。
- 十 玉琢かれずば、光なく、人學びざれば、道を知らぬとこそ、教へらるゝ。
- 十一 日日、この驛にて乗降する旅客は四百人ばかりもやあるべし。
- 十二 住居を定むに、都會と田舎はいづれかよきと、君は信じらるゝや。
- 十三 わが乳母なりし某なる媼は、その子なる男に寫眞機を持たして、

請ふて従ひ來ぬ。

- 十四 雨やみて、月すら明なるに、いかでかこの良夜を空しふすごすべけれ。
- 十五 下部に酒飲ますは心すべきと、徒然草なる書にも戒めあり。
- 十六 われは、かつ驚き、かつ悔ひて、臍を噬めども、そのかひなし。
- 十七 主人なる伯父上も、決してこの誠を忘れそと、厚ふ諭し給へり。
- 十八 ほど狭しとも、夜臥する床あり、晝居る座あり。
- 十九 舟へ乗らむには、東に行く方近しとも、又、堤を下るこそよきとも、傳へらる。
- 二十 この度、海岸に新築されたる龜屋なる旅館に、大臣は逗留さるゝ由なり。
- 廿一 株主は、會社を解散すべきや否やを、委員に取調さして、評議を凝らし居れり。
- 廿二 姑息の手段を以て、一時を纏縫し得るも、竟には解散の不運を免る能はざるべし。

廿三。かの人らは、同盟に加れよと、しばく勸誘されしも、利害異なれりとして、應せざりし。

廿四。縣下の實業をして、今日のごとく發達するを得せしめたるには、君の功實に多きにをるとぞ。

廿五。流れゆくわれはみくづとなりぬるも、君しがらみとなりてとゞめや。

次の漢文を、正しき國文に書き下せ。

廿六。屬予作文記之。

廿七。孺子可教、後五日與我期於此。

廿八。嗟乎、使平得宰天下、亦如此肉矣。

廿九。古之所謂豪傑之士、必有過人之節。

三十。天下有大勇者、卒然臨之而不驚、無故加之而不怒。

第十一章 文。

文

言語を書きつらねて、完全なる思想を表せるを文といふ。文には、一つの思想を表せるものあり。

空、晴る。 月、清し。 春、來。 花、咲く。 鳥、鳴く。

これらを單文といふ。亦、二つ以上の思想を表せるもあり。

空、晴れ、月、清し。 春、來れば、花、咲き、鳥、鳴く。

これらを聯構文といふ。思想の完全ならぬを、句といふ。

晴る、空。 清き月。 來る春。 咲く花。 鳴く鳥。

第一節 單文の構成。

單文の構成

主語 説明語

一つの思想の上に、先づ、主として浮ぶ事物ありて、次に、その事物の動作、作用、形状、性質等これに伴ふ。この事物をいふ語を、文の主語といひ、動作、作用、形状、性質等をいふ語を、文の説明語といふ。

標準的  
目的  
客語

空(主語)—晴る。(説明語)

月(主語)—清し。(説明語)

われも(主語)—行かむ。(説明語)

二つ(主語)—ありき。(説明語)

遠山は(主語)—霞み渡れり。(説明語)

汝(主語)—行け。(説明語)

たれか(主語)—答へ得べき。(説明語)

富士山(主語)などこそ—高けれ。(説明語)

されば、主語は名詞(代名詞、數詞)にて成り、説明語は動詞、形容詞、助動詞にて成る、又、且爾乎波の添へるもあり。説明語の、有對自動、單對他動、複對他動、所相、使役相なるには、その標準、又は、目的をいふ語を、別に、加へて、その思想を完全ならしむるを要す。かゝる語を客語といふ。例へば、

人(机に)—凭る。われらは(夕立に)—降られぬ。

書記は(議案を)—讀み上ぐ。議案は(書記に)—讀み上げらる。

かれは(書を)—載す。書は(棚に)—載せらる。  
(かれに)

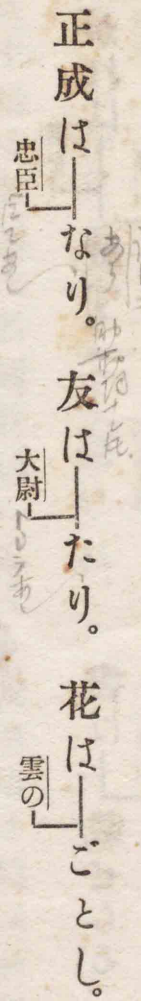
母(子を)—起ささす。主人(客を)—凭らす。  
(椅子に)

議長(議案を)—讀み上げしむ。  
(書記をして)





客語は、主語と同じく、名詞(代名詞、數詞)にて成り、且爾乎波、これに添ふ。又、

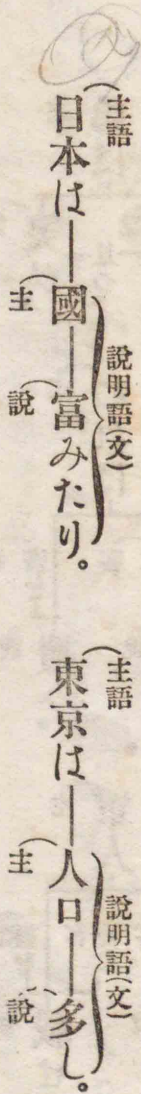


この例にては、指定の助動詞「なり」「たり」「比況の助動詞「ごとし」を説明語とし、その添へる名詞の「忠臣」「大尉」或は「雲の」等を客語と見る。

文には、必、主語と説明語と、或は、別に、なほ、客語とあるを要す、

その位置は、主語は上に居り、説明語は下に居り、客語はその間に居るを、正則とす。

われは、客語かれをして、客語棚に、説明語書を、載せしむ。  
なほ、又、

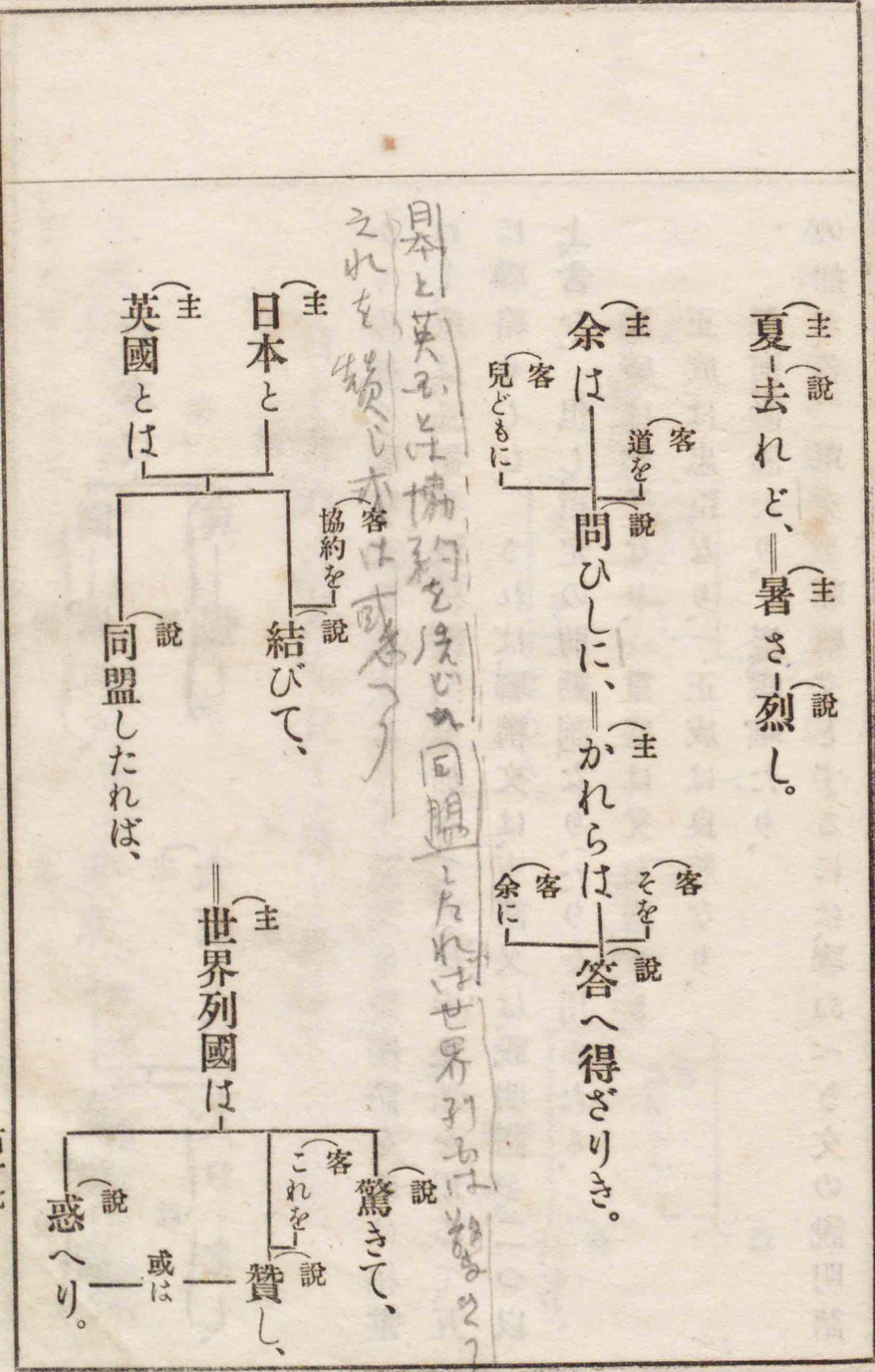
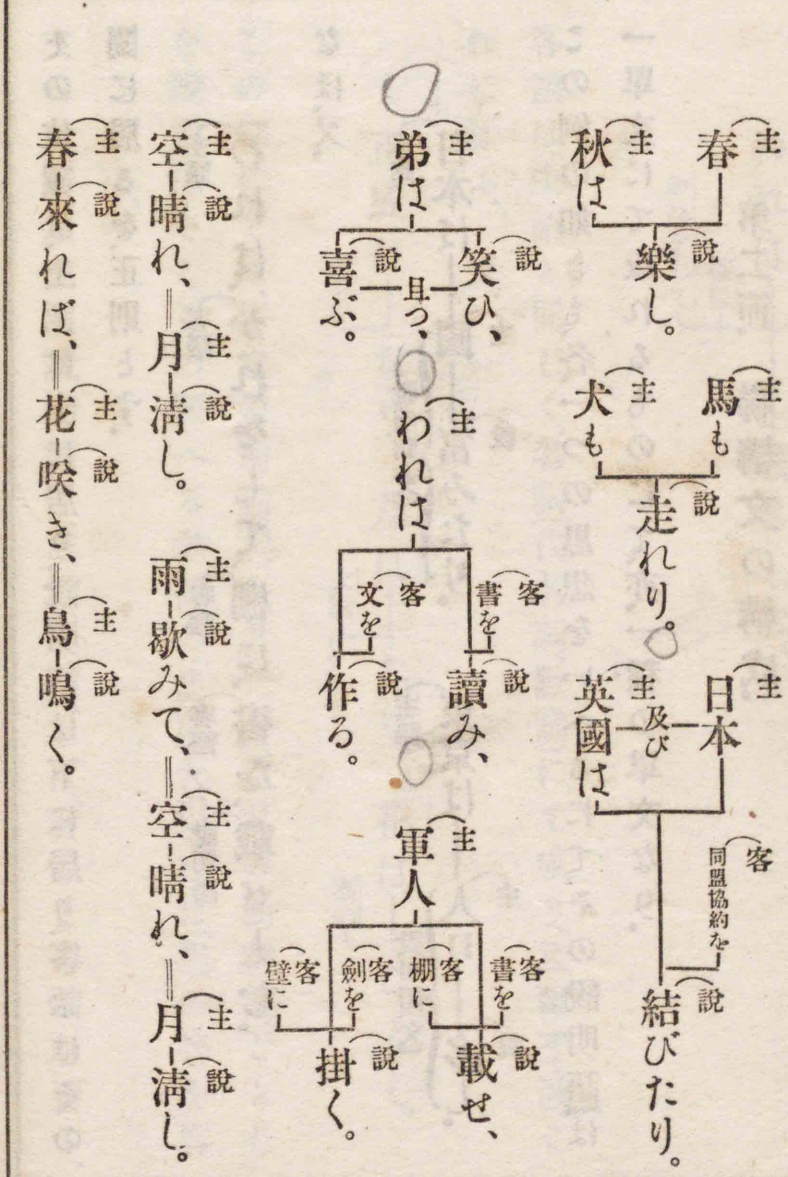


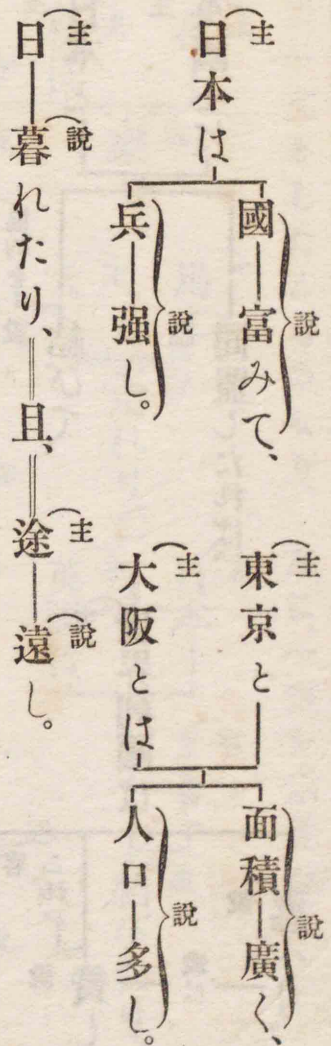
この例の如きも、各、一つの思想をいへるにて、その説明語は一單文にて成れるものにて、亦、一種の單文なり。

第二節 聯構文の構成。

聯構文は二つ以上の思想を表せるものにて、二單文以上を

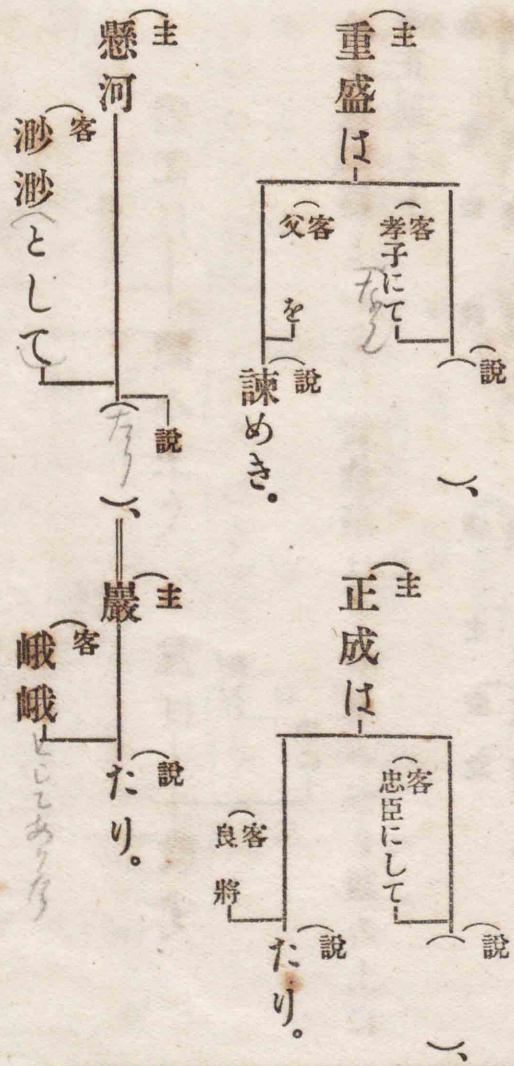
聯ねて、一文としたるものなり。左に、一斑を示さむ。





かくの如く、聯構文を成すには、主語又は、説明語を、或は相重ねて、或は、互爾乎波、接續詞を加へて、或は、中止法を用ゐて、互に聯絡せしむ。されば、聯構文は、主語、又は、説明語を、二つ以上、含む。但し、指定の助動詞「なり」たり「を」を用ゐたる、重盛は孝子なり、重盛は父を諫めき、正成は忠臣なり、正成は良將なり、懸河、渺渺たり、巖峨峨たり、の如き、各、二單文を聯構文とするには、聯ぬべき文の説明語

を略して、互爾乎波を加ふ、即ち、

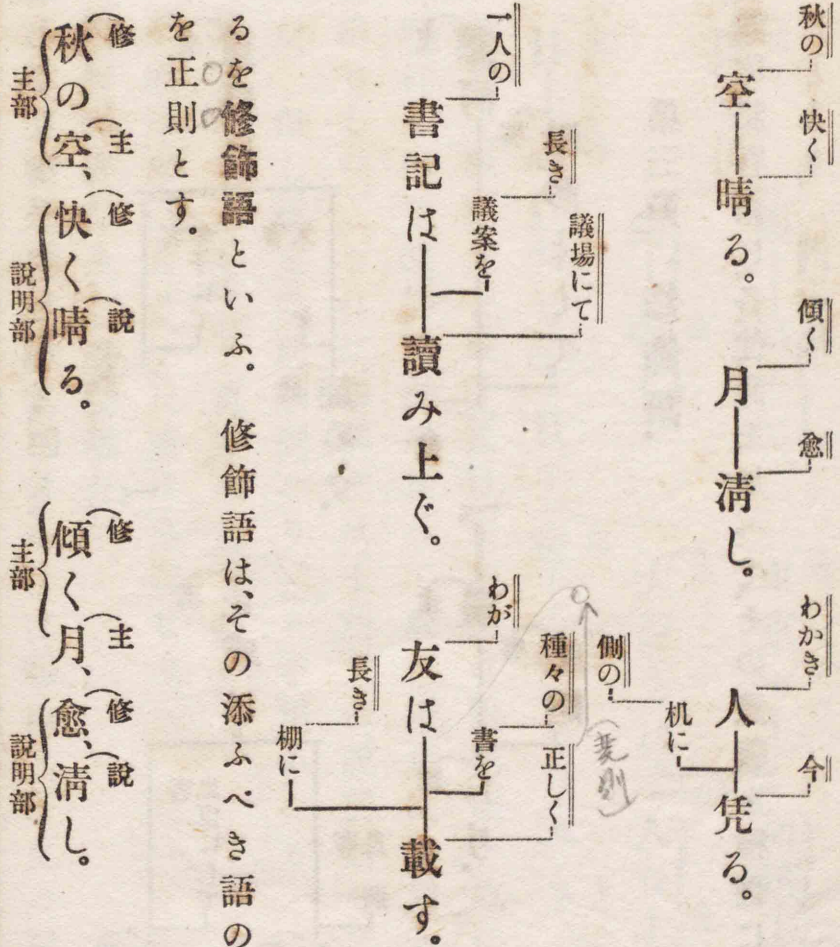


第三節 修飾語。

主語説明語、客語に、各、他語を加へて、その意義を種種に修飾することあり。例へば、

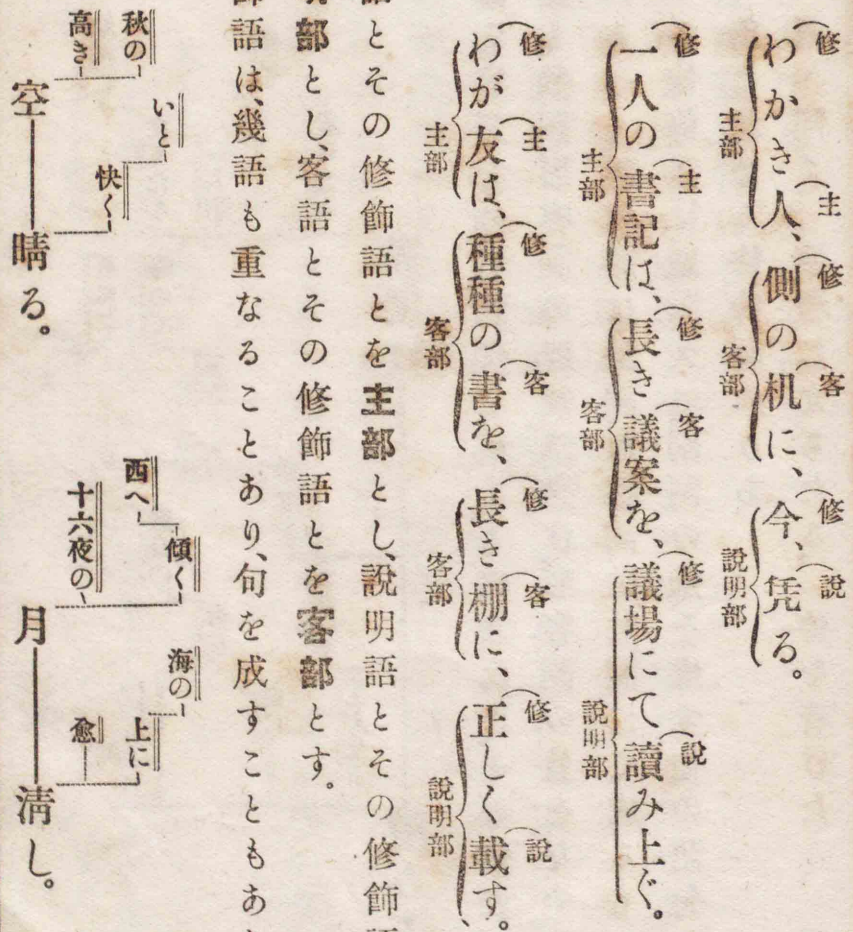
修飾語

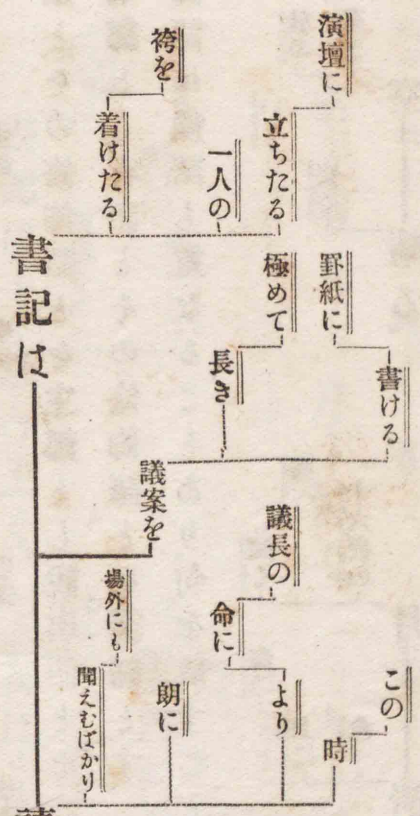
かゝるを修飾語といふ。修飾語はその添ふべき語の上に居るを正則とす。



主部  
説明部  
客部

主語とその修飾語とを主部とし、説明語とその修飾語とを説明部とし、客語とその修飾語とを客部とす。修飾語は、幾語も重なることあり、句を成すこともあり。





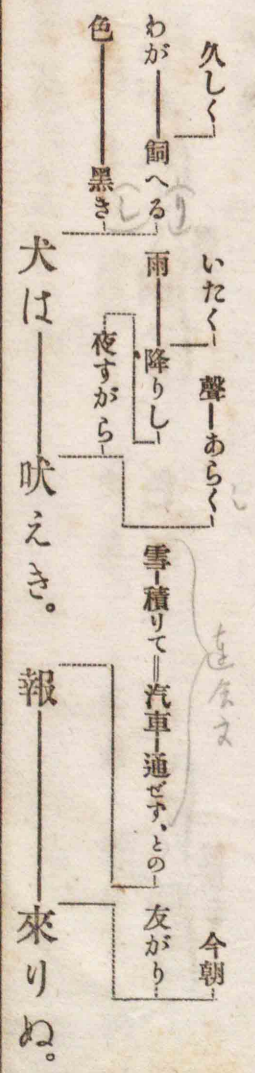
主語と客語とは、名詞にて成るものなれば、その修飾語は、いづれも、動詞、形容詞の連體法、又は、形容詞の意をなす他の語句たるべく、説明語は、動詞、形容詞、助動詞にて成るものなれば、その修飾語は、副詞、又は、副詞の意を成す他の語句たるべし。前に示せる修飾語のうち、

西へ傾く、演壇に立ちたる、袴を着けたる、野紙に

形容詞

副詞句

書ける、極めて長き、等は**形容詞句**にして、又、いと快く、海の上に、この時、議長の命により、場外にも聞えむばかり、等は**副詞句**なり。これらの句は、既に、その一文の主語、説明語、客語等の修飾語となれるものなれば、これらの句中の動詞、形容詞、標準又は目的をいふ語等には、説明語、或は客語などの名目を附すべくもあらず。單文又は聯構文も、その獨立の體を失ひて、他語の修飾語となることあり。



この二例にて、

<sup>(主)</sup>わが <sup>(修)</sup>久しく <sup>(説)</sup>飼へり、  
<sup>(主)</sup>色、黒し、  
<sup>(主)</sup>雨 <sup>(修)</sup>いたく <sup>(説)</sup>降りき、

説明部

説明部

<sup>(主)</sup>聲 <sup>(説)</sup>あらし、

又、の四單文は、その説明語に連體法、もしくは、副詞法を用ゐて、

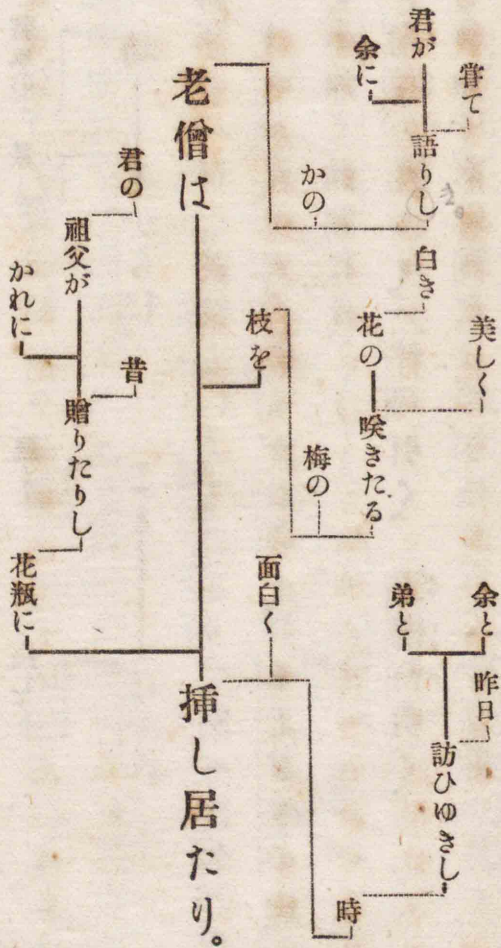
<sup>(主)</sup>雪積りて、<sup>(主)</sup>汽車通ぜず、

の一聯構文は、別に亘爾乎波を加へて、各他語の修飾語となるなり。かくて、これらの文中の主語、説明語、客語等は、各その本分を失ひて、全文の上より見たる主語、説明語等の一修飾語たる位置に立つ。なほ、次の例を見よ。

fifty fifteen

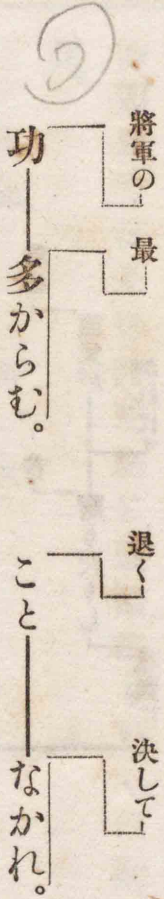
以上を示せる諸例は、單文に修飾語の添ひたるものなり、聯構文なるも、これに準じて知るべし。

「明に」稀に「遙に」などに終る副詞の、修飾語となりて、動詞の「あり」に連るときは、「明なり」「稀なり」「遙なり」など、熟して、一説明語をなすか、る説明語は、動詞を畧して、或は、尙、別に亘爾



乎波を加へて、他の句、文と聯絡すること、指定の助動詞「なり」、  
たり」に似たり。

月―明に(一)―星―稀なり。里―遙にして(一)―人―訪はず。  
形容詞の副詞法にて成れる副詞も、「あり」と熟して、一説明語  
をなす。



枕詞

ひさかたの  
の空、天の  
の星、月、星

修飾語の一種に、枕詞といふものありて、例へば、名詞には、

ひさかたの天、あらがねの土、あしびきの山、

などの如く、動詞には、

刈菰の亂るゝ、梓弓引く、玉櫛箭明く、

などの如く、形容詞には、

張る

玉櫛箭明く、

玉櫛箭明く、

又、

玉櫛箭明く、

ぬばたまの黒き、眞木柱太き、菅の根の長き、  
などの如く、副詞には、

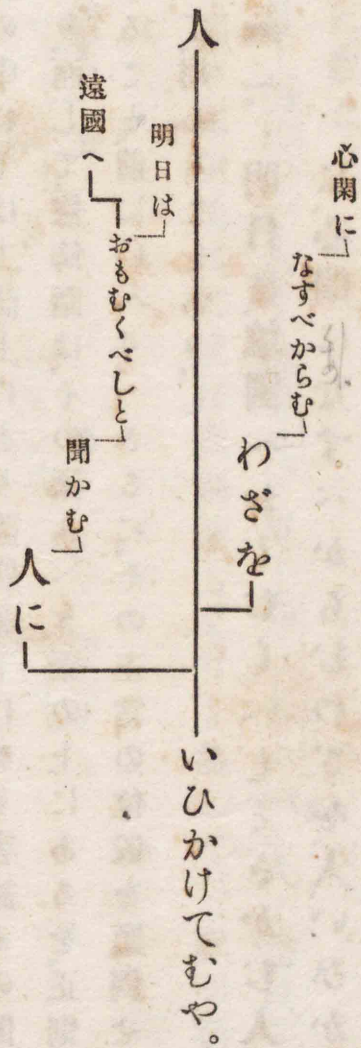
しのゝめのほがらくと、つがの木のいやつきくんに、  
などの如く、用ゐらるすべて、これらは、一修飾語と見るべし。

第四節 語句の倒置、省畧。

一文の中には、主語、上にあり、説明語、下にあり、客語、その間  
にあり、而して、修飾語は、その添ふべき語の上にあるを、正則  
とすること、前にいへり。さるに、その正當の位置を顛倒せ  
しめて、用ゐることあり。

例一。明日は、遠國へおもむくべしときかむ人  
に、心閑になすべからむわざを、人、いひか  
けてむや。

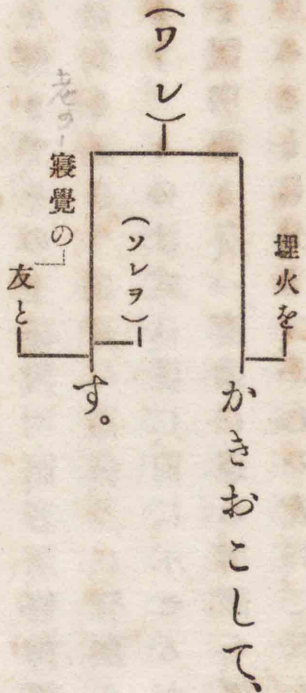
この文を解きて、その文脈を明にすれば、次の如し。



語句の倒置

されば、この文にては、主語なる「人」と、客語の「人に」屬する修飾語なる「明日は」とを、倒置したり。大方、かくの如く、語句を倒置するは、趣意の最深きものを、先づ言ひて、その意を強くせむが爲なり。

例二。埋火をかきおこして、老の寐覺の友とす。  
この文を解きて、文脈を明にすれば、次の如し。



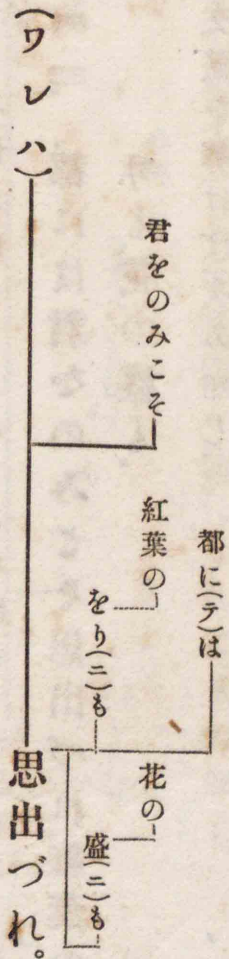
語句の省略

この文は、一つの主語と、二つの説明語とにて成れる聯構文にて、その主語「われ」と、第二の説明語なる複對他動詞「す」の目的をいふ客語「それを」とを畧せるものなり。凡そ、語句の省略すとも、分明に解せらるべきは、省略せらるゝことあり。

例三。都には君をのみこそ思出づれ、紅葉のをりも、花の盛も。  
この文脈を解けば、次の如し。



されば、この文にても、主語の「われは」と、説明語に屬する修飾語に要する「て」「に」などの「且爾乎波」とを、畧してあり。



第五節 文脈の解剖

成文を解きて、その主語、説明語、客語、修飾語等を分類し、省略せる語句を補ひて、相互の關係、及び、管屬を講ずるを、**文脈の解剖**とす。その法式は、既に、前に示せるが如く、先づ、全文の主語と説明語とを、一直系に連れ、客語を、標準をいへると、目的をいへるとに分ちて、かれを左に、これを右に、各傍系に列

法脈  
文脈の解剖

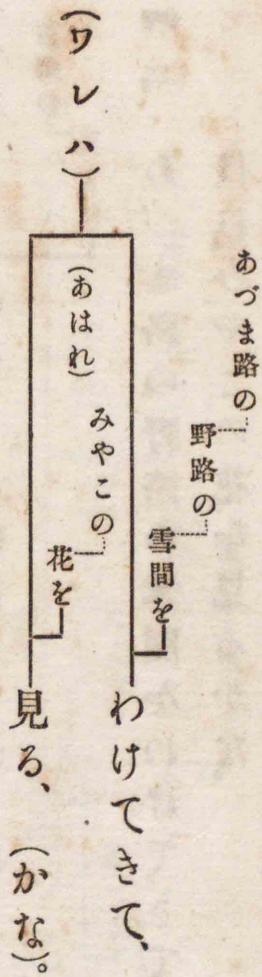
ね、さて、各修飾語を、その所屬に従ひて、適宜に排置す、而して、その關係を標示するには、主語、説明語、客語なるには、**實線**を用ゐ、修飾語なるには、**點線**を用ゐることゝ定む。又、二單文以上の相重疊して、成れる聯構文たるを示すには、各單文の間に、二條の實線を畫くことゝす。なほ、次の數例を見よ。

例一。百薬の長とはいへど、萬の病は酒よりこそおこれ。



例二。あづま路の野路の雪間をわけてきて、あはれ、みやこの花を見るかな。

この例なる「あはれ」かななどの、全文、全句に係る感動詞は、文脈の外に置く。

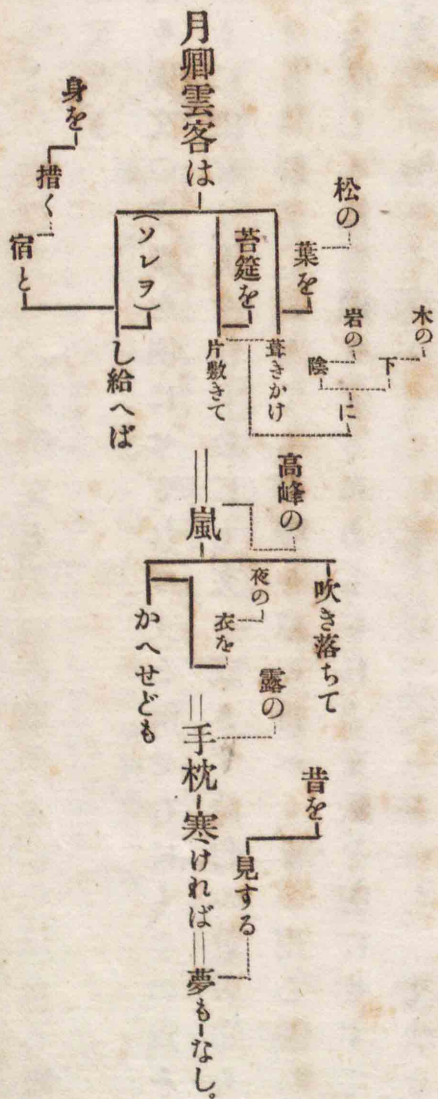


例三。人の才能は、文明にして、聖の教をしれるを第一とす。



例四。月卿雲客は、木の下、岩の陰に、松の葉を茸

きかけ、苔筵を片敷きて、身を措く宿とし給へば、高峰の嵐吹き落ちて、夜の衣をかへせども、露の昔を見ずる夢もなし。



即ち、この文は、二つの聯構文と、二つの單文とにて成れる聯構文なり。

凡そ、成文の文脈を明にせざれば、文を解せむにも、その意を知るに由なく、文を作らむにも、文を成さず、語句の意の知られざるは、辭書に就きても、解釋を求め得べく、その用ゐ誤れるも、必しも意義通ぜずとにあらざれど、文脈を明にせずては、文章の用全く廢れて、これなきに等しかるべし。文法を學ぶ者は、最も此に力を用ゐ、十分に研究して、その明確なる知識を得むことを要す。

次の諸文の文脈を解剖せよ。

- 一、多能は、君子の耻づる所なり。  
御堂の方に、法師ども、まゐりたり。
- 二、西の山の麓に、一字の御堂あり。
- 三、

少 C. B. A. 説主 説主

水 沐

自如 有 有 有

御堂の所に、法師ども、まゐりたり。  
西の山の麓に、一字の御堂あり。

- 四、吳竹は葉ほそく、河竹は葉ひろし。
- 五、秋の月は限なくめでたきものなり。
- 六、滿座興に入ること限なし。
- 七、門前草深くして、庭上露しげし。
- 八、偽りても賢を學ばむを、賢といふべし。
- 九、國家の品位を高むる方策は、如何。
- 十、吉野の花、左近の櫻、皆ひとへにこそあれ。
- 十一、大方は家居にこそ、事ざまはおしはからるれ。
- 十二、をりふしのうつりかはるこそ、物ごとにあはれなれ。
- 十三、神佛にも、人のまうでぬ日夜まゐりたるよし。
- 十四、月滿ちてはかけ物、盛にしては衰ふ。
- 十五、この唐櫃は上古より傳りて、その始をしらす。
- 十六、生を苦めて、目をよるこばしむるは、桀紂が心なり。
- 十七、すこしの事にも、先達はあらまほしきことなり。
- 十八、傳奏未だ奏せざる前に、先づ直衣の袖をぞぬらしける。

- 十九 　あらためて益なきことは、あらためぬをよしとするなり。
- 二十 　さしたることなくて、人のがりゆくは、よからぬ事なり。
- 廿一 　身をやぶるよりも、心をいたましむるは、人をそこなふ事、なほ多し。
- 廿二 　驥を學ぶは、驥のたぐひ、舜をまなぶは、舜の徒なり。
- 廿三 　一期のたのしみは、轉寢の枕の上にはまり、生涯の望は、をりをりの美景にのこれり。
- 廿四 　あさましかりつる夏も暮れて、秋にも既になりけり。
- 廿五 　春は、藤波を見る、紫雲の如くにて、西のかたに匂ふ。
- 廿六 　嗚呼、美術品の製作は、わが國民の特有の長技なり、特得の長所なり。
- 廿七 　行末遠き旅の空、おもひつゞけられて、いといたうものがなし。
- 廿八 　くらき人の、ひとをはかりて、その智を知れりと思はむ、更にあたらず。
- 廿九 　西の戸より入らむとすれば、又、その戸はたと閉ちて、南の戸は開

きぬ。

- 三十 　雲の鬢霞の眉花のかほばせ、雪の膚繪にかくとも、筆も及びがたし。
- 三十一 　無益の事をなして、時をうつすを、おろかなる人とも、僻事する人ともいふべし。
- 三十二 　習慣にさからひ、時論をやぶり、さらに一新路をひらくは、かたきが中のかたきことなり。
- 三十三 　酒をとりて人に飲ませたる人、五百生が間、手なき者に生るとこそ、ほとけは、説き給ふなれ。
- 三十四 　工川成が家にゆきて、かく來れるよしをいひ入れたるに、こなたに入り給へ、といはしむ。
- 三十五 　大路のさま、松たてわたして、花やかに嬉しげなるこそ、またなくあはれなれ。
- 三十六 　よき人の、のどやかに住みなしたるところは、さし入りたる月の色も、一きはしみくと見ゆるぞ、かし。

三十七. かくては、一日片時も、ありながらへむ心地もなければ、流石に消えぬ露の身の命あらばと思ふ世に、たのみをかけてや残らむ。

三十八. 軍のには、戎衣かいつくろひ、秋の霜に、露の命、きえをあらそふ、武士のならひばかり、悲しきはあらざりけり。

三十九. あな、あはれ、鋤き残したる片岡は、草かるうなるども、靈ありなど、憚りて、木しげき藪、ふみわけたる跡だになし。

四十. あな、あはれ、雨そぼふる宵、月くらき曉、青き火もえ、叫ぶ聲きこゆなど、姫翁は語るぞ、かし。

四十一. おもひきや、君は、やがて世を遁れ給ひて、駒籠なる屋形に籠り居給ふべき仰を蒙り給はむとは。

四十二. 黒戸は、小松御門位に即かせ給ひて、昔、たゞ人にておはしまし、時、まसान事せさせ給ひしを忘れ給はで、常にいとなませ給ひける間なり。

四十三. 人、勝地にあそべば、たゞちにその美を感じ、人、花月にむかへば、た

だちにその艶を感ず、これ皆情の作用にして、知の作用にはあらず。

四十四. 京にすむ人、いそぎて、東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きて、その益、まさるべき事をおもひ得たらば、門より歸りて、西山へ行くべきなり。

四十五. 一生のうち、にむねとあらまほしからむ事の中に、いづれかまさると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外はおもひすて、一事をはげむべし。

四十六. あすか川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば、時移り、事去り、たのしび、かなしび、ゆきかひで、花やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなり、變らぬ住處は、人あらたまりぬ、桃李ものいはねば、誰と共にか、昔を語らむ。

四十七. ふるき都を來て見れば、淺茅が原とぞあれにける、月の光はくまなくて、秋風のみぞ身にはしむ。

四十八. 櫻ちる木の下風は、寒からで、空に知られぬ雪ぞ降りける。

結法

四十九 行き暮れて、木の下かげを宿とせば、花やこよひの主ならまし。  
五十 ひさかたの月の桂もをるばかり、家の風をも吹かせてしがな。

第十二章 結法。

二月八日、(水)

一文の説明語たる動詞、形容詞、助動詞にて、その文を結ぶに、二様の法あり、終止の結法と、命令の結法と、これなり。但し、形容詞には、命令の結法なく、助動詞にも、なきが多し。

終止の結法

一、終止の結法。終止の結法は、單に、事物の動作、情態等をいひて、文を終止するものにて、次の三種に分る。

尋常の結法

その一、尋常の結法。尋常、文を終止する結法にて、文の説明語なる動詞、形容詞、助動詞に、その第一終止法を用ふる。例へば、

空しく、一年を歴。專斷することを得。鳥集り居り。

「ぞ、なむ、や、か」の結法

月、清し。花、美し。人に知らる。子に教へらる。月、立ちにけり。汝、勉むべし。春海の如し。  
その二、「ぞ、なむ、や、か」の結法。上に、第二類「爾乎波の」ぞ、なむ、或は「や、か」のあるときに、文を終止する結法にて、文の説明語なる動詞、形容詞、助動詞に、その第二終止法を用ふる。例へば、

雨もぞ降る。花ぞ落つる。然ぞおぼゆる。神にぞおはする。見るぞ善き。聞くぞ樂しき。利をぞ得さする。名をぞ留めし。かくぞあるべき。  
風になむ散る。近くなむ見ゆる。母をなむ戀ふる。冬なむ寒き。無きなむまされる。家になむありし。物をや思ふ。年や暮る。行きやする。夜や長き。年や久しき。惜しくやあらぬ。櫻花、今や散るらし。

何をか取る。何れの時にか忘る。誰れかある。いづれか好き。何か常なる。今日降る雨に散りか過ぎなむ。小夜か更けぬる。

副詞の「なぞは」は「なにぞ」の約りたるにて、又「いかゞ」は「いかに」かの約りたるなれば、この二語のある文には、また「ぞなむ」や「か」の結法を用ゐる。

「こそ」の結法

その三「こそ」の結法。上に、第二類「爾乎波」の「こそ」の加れる文を終止する結法にて、文の説明語なる動詞形容詞助動詞に、その第三終止法を用ゐる、この結法は、他に「ぞなむ」「や」「か」のあると、なきとに拘らず。例へば、

春をこそ待て。身をこそ恨むれ。斯くこそあれ。路こそ無けれ。物こそ悲しけれ。人こそ見えぬ。行きてこそ見ゆ。昨日こそ早苗とりしか。

命令の結法

右の三種の結法は、既に、動詞、形容詞、助動詞の條下にもいへり。

二、命令の結法

命令の結法は、他に、動作を命じ、又は、請願ふ意を言ひて、文を終止するものにて、その説明語なる動詞、助動詞に命令法を用ゐる。例へば、

荒き浪風、心して吹け。これに懲りよ。われに教へよ。馬を射よ。苔の袂よ、かわきだにせよ。おもひを述べしめよ。忠良の臣民たれ。怠ることなかれ。

第一類「爾乎波」の、一句一文を名詞と見て、その意の切るところを承くることも、前に説きたり。されば、これらの句文は、各自に結ぶ。例へば、

経聞きなどするにも、目をくばりながら、見るたるこそ罪や得らむと、おぼゆれ。古里を出でにし後は、月影ぞ

聯構文の轉

昔も見きと、思ひやらるゝ。影こほる、霜夜の月ぞ、秋を  
おきて、時こそあれと、さやけかりける。  
聯構文にては、その説明語は、末に居るものゝ外、皆その結法  
を轉ず。例へば、

風吹(ク)き、雨降る。 風強(シ)ければ、舟出でず。

合戦の道をば、武士にこそ任せらるべ(ケレ)きに、道にも  
あらぬ御はからひ、いか(カ)あらむ。 後宇多の御門

こそゆゝしき稽古の君にましまし(カ)に、その御跡を  
ば、よくつぎ申させ給へり。

右の例にて、括弧内に片假名にて示したるは、轉ぜしめざる  
時の結法なり。

次の諸文の結法を説明して、その誤れるをば、正せ。

例 今、子どもの中には、われこそ兄なれば、今日  
の先陣をば、たれかは驅けむ。

この文は聯構文にて、こそその結法をば轉じ、かの結法  
の方には、未來の助動詞「む」を、第二終止法に用ゐたる  
なり。

- 一、 皆人の形見には、手跡に勝るものあらじ。
- 二、 財多しとてたのむべからず。 時の間に失ひやすし。
- 三、 人極めて多かりといへども、これに似たる童なし。
- 四、 その頃、これを聞く人、いみじきことになむいひけり。
- 五、 あるじも、共に花の下にまるとゐしてなむ、語りくらしつゝ。
- 六、 雲雀は、終日啼き暮して、はては、雲にも臥すにかあらむ。
- 七、 この方丈の庭よりこそ、奥深き谷の紅葉も見ゆれ。
- 八、 童の顔を知りたらばこそ、搦め、ど顔を知らずしては、いかでか  
からめむ。



- 九。 廣庭なる主従士卒は、瞬もせず氣をこめて、見るめもいとゞはるかなる。
- 十。 兄にて候ふ義朝などこそ、驅け出でんすらめ。
- 十一。 太刀とりなほし立つたるけしきほめぬ人こそなかりけり。
- 十二。 君こそ、御心弱く渡らせ給ひ候ふとも、人人、それよき様に申させ候へや。
- 十三。 この太刀、寸こそ短けれども、身に於ては、逸物にてあるぞ。
- 十四。 佐々木、いかでかかくと知るべきなれば、十七騎にて、さしくつろぎて歩ませきたり。
- 十五。 わが功におきては、日本國を賜へ、もしくは、半國を賜りても、足るべからず、など申すめる。
- 十六。 鳥羽院の時代にや、諸國の武士の、源平の家に屬することを停むべしといふ制符、たびゝありき。
- 十七。 おのれらよりは、なかく、御存知などもこそ候はめと、いとうやうやしく、いひたりしこそ、いみじくおぼえき。

呼應

- 十八。 その歌世をうらみたる心ばへなるを、うらみざりしといひたるこそ、いと心得ず。
- 十九。 古の歌を説き得たることの正しきすぢは、この人をこそはじめとはすめれど、歌よむことの上までは、心およばずやありけむ。
- 二十。 月のあかき夜、  
海ならず、たゞよふ水の底までも、きよき心は月ぞてらさむ。  
これかしこくあそばしたり、かし。げに、月日こそは照らし給はめ、とこそはあめれ。

第十三章 呼應。

一文の中にて、上下の語義を、互に相應するやう、掛け合せて用ゐるを、呼應とす。呼應に數様あり。

第一節 標準、目的の呼應。

有對自動、單對他動、複對他動、所相、使役相等の標準と目的と

標準、目的の呼應

をいふ語は、各有對自動詞、單對他動詞、複對他動詞、所相の助動詞、使役相の助動詞に應ず。これを標準、目的の呼應とす。

友約に違ひぬ。馬にて、境内に乘入る事を禁ず。

友約を違へき。われは、復習を終へたり。

馬を境内に乘入るゝ事を禁ず。頭を右へ向けたり。

賊、家人に起きらる。かれは、校長に入學を許さる。

主人、余に文を作らす。父子を學校に入らしむ。

われは、父に、僕をして、見送らしめられたり。

父は、われをして、僕に、見送られしめたり。

されば、校則に違背の生徒などいふときは、校則にといふ標準をいふ語は、その應ずべき動詞を缺くが故に、非なり、校則に違背する生徒など、改めずはあるべからず。

第二節 副詞の呼應

副詞の呼應

特性副詞の呼應

副詞、及び副詞の意を成す語句は、その修飾する動詞、形容詞、助動詞、或は他の副詞に應ず。これを副詞の呼應とす。

昔、男ありけり。明に治る御代。伯父なる人は、嘗て村長たりき。いと美しき花、咲く。花いと美しく咲く。例の如く、式を行ふ。楠公は、湊川に祀らる。されば、毎日、出席の生徒などいふときは、毎日といふ副詞は、その應ずべき語を缺くべければ、毎日、出席する生徒など、改めずはあるべからず。

又、副詞の中には、一種特性のものありて、その意義を、下の語に係けて、一定の用法を起さしむるものあり。これを特性副詞の呼應とす。次に、その著き數例を擧ぐ。

をさく。

下は、必、打消の語にて承く、をさく、劣る

まじ、をさく、怠らず。

「決して、絶えて、少しも、毫も、一も、などいふ副詞も、下は、打消の語に限る。」

え。

下を、打消の語、又は、反語にて承く、え言はず、え

ぞ知らぬ、えこそ見わかぬ、えあらじ。

ゆめ。

下には、禁止、又は、打消の語と限る、ゆめ、見せ給

ふな、ゆめく、畏るゝことあるべからず。

たごひ。

下に、必、未定の語を置く、たとひ、頼朝が後胤

なりとも、今更登用すべしとも覺えず。

あに。

必、反語に應ず、豈に、他あらむや。

けだし。

下は、必、疑ふ語、或は、未定、未來、又は、推量の語

に應ず、蓋、このことあらむ、蓋、事實なるべし。

もし。

亦、未定、未來の語、疑ふ語に應ず、明日、もし、雨降

らずば、行かむ、もし、心のかはることのありもやせむ、友

もし來むに、われあらでは、あしかりなむ。

すべて、疑ひ、又は、豫期する意の副詞の語句は、未來、未定、推量

の語、反語に、呼應す。

疑ふらくは、これならむ。

恐らくは無けむ。

願は

くは、聞かむ。

いかにとならば。

いかにすとも。

過去、又は、未來の意をいふ副詞の語句は、それく、過去、既定、

未來、未定、命令の語と呼應すべきこと、言を待たず。

既に成りぬ。

曩に謀りおきつ。嘗て見たれば、かね

て、おもへば。

昨日行きき。去年、失せてけれども。

明日行かば。

來年逢はむ。今より後改めよ。

第三節 反語の呼應

立 立 立 立

は口はらうすや  
十レト  
消か難  
消か難  
消か難

例一。世の中は、何か常なるか、

例二。秋のわかれば、惜しくやはあらぬ。

右の例一なるは、世の中にては、何物が常住なるか、例二なるは、秋のわかれば、惜しくはあらぬかと、單に疑問するまでの意なり。さるに、例一なる文の下に、

「飛鳥川、昨日の淵ぞ、けふは瀬となる」

と、變遷の常ならぬ意を確言する文を加ふるときは、これに呼應し、反動して、何物が常住なるかの平説の疑問は、却て、打消の確定に變じて、何物も常住ならずの意となる。これに反して、例二なる文の上に、

「もろともに、なきてと、めよ、きりくす」

と、別の惜しき意を確言する文を加ふるときは、これに呼應し、反動して、惜しくはあらぬかの打消の疑問は、却て、平説の

反語

反語の呼應

確定に變じて、惜しくはあるぞの意となる。これを反語といふ。單純の疑問なると、反語なるとは、湊合せる他の文句の意に呼應して、分る、これを反語の呼應とす。

反語に用ゐるや、かは、即ち、疑ふ意をいふ第二類、且爾乎波にて、その承接の定則は、既に、前に説けり。この二語には、また、感動詞のは、又は、もを添へて、やは、かは、「やも、かも」とも用ゐる。而して、又、なんぞ、驚かざらむ、いづくんぞ、然らむ、いかんぞせざるなどの、なに、いづく、いかに、も、疑辭なるが故に、や、かの、且爾乎波なけれども、反語に用ゐらる。

○ 次の諸文に就きて、呼應を説明し、誤あらば、正せ。

例一。委員は事實を調査の爲に集會せり。

この例にて、事實をといふ目的をいふ語は、應ずべき

他動詞を缺きたり。改めて、事實の調査の爲に、或は、事實を調査せむが爲に、など、正すべし。

例二。もし、成功すれば、大なる譽なるべし。

「もしは、未定、未來の語、疑ふ語に應ず、さるに、この例なるは、然らず。もし、成功せば」と正すべきなり。

- 一。内裏をば清盛などに守護せさせられ候へ。
- 二。われは、親にも連れらるまじ、兄にも具すまじ。
- 三。構へて、國の者どもに、にくまれずしておはすべし。
- 四。大將、その御所へ參り、まづ隨身をもつて、總門を叩かせらる。
- 五。子どもを成人せさせて、人數に思はれ奉るこそ嬉しけれ。
- 六。かんど鳥は、おのれ啼きて、人をさびしがらせむとす。
- 七。十餘人に手を負はせ、八九人を斫伏せて、廣庭に跳り出で、軒端の松を木傳うて、ひらりと屋上にとび登りぬ。
- 八。もし、一步をあやまれば、環を盤にまろばすが如くなるべし。

- 九。かれは、この地の所用を終りて、昨日、大阪へ向け、出立ちたり。
- 十。舊役員は、新任者に、事務を引繼の手續をなしたり。
- 十一。高等學校に入學を望む者、年々に増加の姿なり。
- 十二。本社の見習に採用を願ふ者は、試験の前日まで、庶務課に申出でよ。
- 十三。この學期には、一層勉強せよと、始業式に、校長の諭告の旨に従ひ、生徒は、熱心に業を受けて居り。
- 十四。明治廿七八年戦役の結果によりて、日本は、清國をして地を割き、金を償ひ、港を開きたり。
- 十五。汝、もし益友たれば、汝の友をして、惡に陥るべからず。
- 十六。敵の軍艦、たとひ、幾百あるも、千尋の海へ撃沈めよ。
- 十七。冬がれのけしきこそ、秋にはをさく、おとるまじけれ。
- 十八。命ばかりはいくれども、足手腰もうち折りて、起居もえせず。
- 十九。えもいはぬにほひの、さとかをりたるこそをかしけれ。
- 二十。このたびは、決して好結果を得べき望ありと、技手等は、勇みて試

驗に着手せり。

廿一。有志者は、凱旋軍を歓迎の準備に、着手中なりといふ。

廿二。たとひ、廣く作れりとも、たれをか宿し、たれをかすゑむ。

廿三。常にありき、常に動くは、これ養生なるべし、何ぞいたづらにやすみ居らむ。

廿四。人を惱すは、また罪業なり、いかゞ他の力をかるべき。

廿五。この人は、歌道などもほまれありしかば、もの書かぬ程の事やはあるべき。

廿六。その人にもあらぬ目代をさして、國を治めしかば、いかでか亂國とならざらむ。

廿七。大方、おのれ一身は、恩にはこるとも、萬人の怨を殘すべきことは、などかかへりみざらむ。

廿八。衣服住居のもの、なほ、かつ美ならむことを好む、いはむや、同類の人の顔色麗しくて、満足するを見るをや。

廿九。春の夜の、闇はあやなし、梅の花色こそ見えぬ、香やはかくるゝ。

三十。また、播磨の國におはしつきて、明石の驛といふ處に、御やどりせ

しめたまひて、驛の長の、いみじうおもへるけしきを御覽じて、つくらしめたまへる詩いとかなし。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

次の漢文を、正しき國文に書き下せ。

一。父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎、以臣弑君、可謂仁乎。

二。匡人嘗爲陽虎所暴、孔子貌類陽虎、止之。

三。楚使人聘之、陳蔡大夫謀曰、孔子用於楚、則陳蔡危矣。

四。死馬且買之、况生者乎、馬今至矣。

五。今王必欲致士、先從隗始、況賢於隗者、豈遠千里哉。

六。先帝知臣謹慎、故臨崩寄臣以大事也。

七。信義行於君子、而刑戮加於小人。

八。日照香爐生紫煙、遙看瀑布掛長川、飛流直下三千尺、疑是銀河落九天。

九 去年今夜侍清涼秋思詩篇獨斷腸恩賜御衣今在茲捧持每日拜餘香

秋の夜半に  
去年今夜侍清涼  
秋思詩篇獨斷腸  
恩賜御衣今在茲  
捧持每日拜餘香

日本文法中教科書終

明治三十五年四月廿九日印刷  
明治三十五年五月三日發行

日本文法中教科書  
定價金 四拾錢

文部省檢定濟  
明治三十五年七月一日



中學校國語科  
師範學校

著者兼發行者 大槻文彦  
發行所 東京府北豐島郡日暮里村二百五十八番地  
印刷者 三木佐助  
發行所 東京市京橋區築地三丁目十五番地  
發行所 東京市小石川區小日向水道町七十三番地

大槻文彦  
西野虎吉  
三木佐助  
野村宗十郎  
東京 関成館  
大阪 関成館  
（長距離加入）電話東局八〇七番

